『西南アジア研究』No. 32, 1990

ミール・アリー・シールの学芸保護について

久保一之

Nawā'ī の筆名[1]で知られる Mīr 'Alī Shīr(Amīr Niẓām al-Dīn 'Alī Shīr：1441-1501)はチャガタイ・トルコ文学の確立者であり，その著作(主に韻文)は現代に至るまで広く愛好され，彼の詩人としての名声は不朽のものとなっている。この偉大なトルコ詩人が後半生の殆どを過ごした，ティムール朝 Sulṭān Ḥusayn Mīrzā(在位1470-1506)時代の首都ヘラートでは，学芸や建設活動が非常に盛んで，所謂"ティムール朝文化"の最盛期が現出されていた。当時のヘラートに居住した数多くの著名な学者，文人，芸術家の中で，'Alī Shīr は，代表的人物として，また洗練された文化の象徴的存在として，高名なペルシア詩人 Mawlānā Nūr al-Dīn 'Abd al-Raḥmān Jāmī(1414-92)と並び称されるのが常である。しかし，同時に 'Alī Shīr は，君主 Sulṭān Ḥusayn に勝るとも劣らない学芸の保護者でもあったのである。

Sulṭān Ḥusayn 宮廷における 'Alī Shīr の政治的活動を素描して"より現実的な"'Alī Shīr 像を提示した Бартольд が，"彼自身の文学活動の外に，Mīr 'Alī Shīr の歴史的重要性はその建造物と特に学芸保護にある"と指摘したのは60余年前のことである[Бартольд 1928：200, 257]。その後，「学者や芸術家たちに対して，'Alī Shīr Beg に匹敵するような保護者・援助者は，未だかつて外には知られていないであろう」という同時代人の言葉[BN：171 a]は繰り返し引用され，建築・都市研究の観点から 'Alī Shīr の華々しい建設活動が言及される機会も増えてきた。また，当時のヘラートで王族以外の人々が学芸保護や建設活動をなし得た社会経済的要因については，最近 Subtelny によって一つの解釈が提示された[Subtelny 1988 a]。しかし，'Alī Shīr による学芸保護の実態把握と性格付けは未だ試みられていない。この試みは，'Alī Shīr とその学芸保護に関す

---

1) これはトルコ詩を詠むときの筆名(takhalluṣ)で，ペルシア詩を詠むときは Fānī という筆名を用いた。

る根本的な諸問題を解決し，更には，かつて“ティムール朝ルネサンスと称すべき時代におけるフィレンツェ”と謳われた[Grousset(邦訳)：746]，Sulṭān Ḥusayn 時代のヘラートの文化，及び社会の特性を考えて行く上での，貴重な材料を提供してくれるはずである。

そこで本稿では，‘Alī Shīr に関する具体的で信頼度の高い記事を豊富に収録しながらも，これまで十分には利用されていない三史料 KhA, MA, BW を活用し[2]，Ⅰ．‘Alī Shīr の出自と経歴，及び経済的実力の再検討，Ⅱ．建設活動を通じての諸学者保護育成活動の考察，Ⅲ．‘Alī Shīr と被保護者たちの直接的交渉の考察，を行うことによって，‘Alī Shīr による学芸保護の実態を把握し，更にはその性格を考える[3]。本稿の目的はこれを超えるものではないが，飽くまで結果的に，‘Alī Shīr と Sulṭān Ḥusayn の関係に，これまで指摘されていない新たな側面を見出すことも可能となる。

Ⅰ

‘Alī Shīr の学芸保護を考察するための予備作業として，彼の出自と経歴，及び経済的実力について述べておく必要がある。これらについては Бартольд の古典的研究を始め幾つかの先行研究があるが，未解決の問題や補わねばならない点が少なくない。以下諸史料の記述に基づいて整理しつつ再検討する。

‘Alī Shīr がヘラートに生まれたのは1441年2月9日，ティムール朝第3代君主 Shāh Rukh Mīrzā(在位1409-47)の治世末期のことであった[MA：126 b]。‘Alī Shīr の祖先は代々 ‘Umar Shaykh(ティムールの子)の子孫，即ち Sulṭān Ḥusayn の祖先の「親近

2) KhA, MA, 更には ḤS の著者 Kwāndamīr(後出：表Ⅱ-No. 1)は，‘Alī Shīr の被保護者であり，従者でもあった。BW の著者 Wāṣifī は，‘Alī Shīr の従者の一人(後出：表Ⅱ-No. 25)が母方の近い親族に当たり，自身も晩年の ‘Alī Shīr と会見している[Болдырев 1957：19, 33-4]。尚，この三史料のうち KhA は公刊されておらず，部分的にテキストと英訳を利用できるが(筆者未見)，いずれも良好なものではないようなので[Allen 1981：245]，本稿では写本の KhA(Ⅰ)と KhA(Ⅱ)を用いる。KhA(Ⅰ)は1503年にヘラートで書写された極めて価値の高い写本ではあるが，残念ながら欠落部(恐らく意図的な省略)が多く，さしあたり KhA(Ⅱ)(1592/93年書写)で補った。

3) 尚，先に筆者は，乾燥アジア談話会，並びに重点領域研究「イスラムの都市性」T 班研究会において本稿に関連する研究発表を行う機会を得，その際，多くの貴重な御意見をいただいた(後者の記録：『イスラムの都市性・研究報告』研究報告編・第35号)。ここに記して主催者，出席者の方々に謝意を表する。

(muqarrab)」あるいは「寵臣(makhṣūṣ)」であったとされ，しかも「乳兄弟(kūkaltāsh)」の関係を保持していたという[ḤS：137；MA：144 a]。この両家系間の密接な関係は ʻAlī Shīr が生まれた頃も依然として維持されており，幼年時代の彼は Sulṭān Ḥusayn の父 Ghiyāth al-Dīn Manṣūr (ʻUmar Shaykh の子 Bāyqarā の子)とその親族の「慈愛の眼差し」に見守られ，4 才になると，自身と「乳兄弟の関係(nisbat-i riḍāʻ)」にあった Sulṭān Ḥusayn(b. 1438)に「付き従って」マクタブに通い始めた[MA：127 b；ShN：27 b, 43 b]。しかし，このような数世代に及ぶ ʻUmar Shaykh 家との密接な関係も，ʻAlī Shīr を当時の有力な家系の出身と見なす材料にはなり得ない。

ティムール朝史上，ʻAlī Shīr の生まれた Shāh Rukh の治世は，Shāh Rukh 家に権力が集中した時代であり，Shāh Rukh 家に属さない王族は概して不遇であった[Бартольд 1918：96]。ʻUmar Shaykh 家も決して例外ではなく，Bāyqarā は1415年，22才にして政治権力を失い，その子 Ghiyāth al-Dīn Manṣūr も何の政治権力も持たぬままヘラートに居住していた[Бартольд 1928：213]。ʻUmar Shaykh 家の人物でその後顕著な政治的実力を獲得したのは外ならぬ Sulṭān Ḥusayn であり，従ってそれまでは ʻUmar Shaykh 家との関係によって ʻAlī Shīr の家系が権勢を振うことなどあり得なかったのである。事実，諸史料の中で，ʻAlī Shīr の祖先に関する言及は極めて少なく，名前が確認できるのは父親 Amīr Ghiyāth al-Dīn Kīchkīna と母方の祖父 Shaykh Abū Saʻīd Chang の僅か二人に過ぎない[ḤS：71；LN：133]。しかも，二人共，政治的に重要な役割を果たすことはなかったのである[4]。

ʻAlī Shīr を有力な家系の出身とは見なせないもう一つの理由に，彼が“アミール(またはベグ)”の地位を世襲で保持していたのではないという事実が挙げられる。彼は Sulṭān Ḥusayn の治世当初，「印璽官(muhrdār)」であり，この職を辞した後は単に「近習

---

4) ʻAlī Shīr の母方の祖父は Bāyqarā の「大アミール(amīr al-umarāʼ)」[LN：133]あるいは「最も偉大なアミール」の一人[TS：334]とされ，Bāyqarā 麾下の「軍隊監督官(トヴァア)」であった Abū Saʻīd なる人物と同定可能ではあるが[Muʻizz：110 b]，主君 Bāyqarā の政治活動が余りにも短い。一方 ʻAlī Shīr の父は，ʻUmar Shaykh 家ではなく Shāh Rukh 家の Abū al-Qāsim Bābur 麾下または Mīrānshāh 家の Abū Saʻīd 麾下の人物とされ[LN：133；TS：334；TSh：482]，一時期サブザヴァールの統治者を務めたというが[MN：28]，これは恐らく本来の主君 Ghiyāth al-Dīn Manṣūr(d. 1445/46)没後のことであろう。尤も，Muʻizz にはその名を見出せず，Abū Saʻīd のもとでは「印や地位は保持しなかった」といわれている[LN：133]。

(īchkī)」として仕え，その後父親とは関係無く「アミール」あるいは「ベグ」となって[BN：171 a；ḤS：159；MA：144 a]，最終的にSulṭān Ḥusayn麾下のアミールに数えられたのである[Mu'izz：158 a]。“アミール”という語は当時(著名なサイイドへの尊称として用いられる場合もあるが)トルコ-モンゴル系遊牧部族軍団の指揮官の地位を表し，この地位を世襲で保持するということは，何らかの部族的組織において有力家系に属することを意味した[5]。従って'Alī Shīrは，部族的組織による後ろ盾には恵まれていなかったと考えられ，事実史料中で'Alī Shīrや先述の祖先たちの名に部族名が伴われることはない。この点で「彼['Alī Shīr]の血筋(aṣl)はウイグルのバフシにある」というTRの記述[129 b]が注目される。

Subtelnyはこの記事に基づいて，'Alī Shīrの家系をウイグル時代からの伝統を受け継ぐトルコ人書記の家系と結論付けた[Subtelny 1980：799-800]。確かにティムール朝時代には“バフシ”と呼ばれるトルコ人書記が存在するが，'Alī Shīrとその祖先や親族が書記の職務に従事したと伝える史料はない。それどころか，先述の彼の父親と母方の祖父の経歴は明らかにトルコ系軍人のものであり(注3)，軍人としてSulṭān Ḥusaynに仕えた'Alī Shīr自身が「私の祖先はスルターンの祖先に仕え各々が勇気の財宝庫の宝石，勇敢さの森の獅子であった」と語っている[Waqfīya：xx][6]。起源がウイグルのバフシにあり，軍事における部族的組織の後ろ盾に恵まれていなかったとしても，'Alī Shīrの家系は明らかに軍人の家系となっていたのである。

以上の検討から，'Alī Shīrは決して有力とは言えないトルコ系軍人の家系に生まれたに過ぎず，彼が後にSulṭān Ḥusayn宮廷における実力者となり得た要因は，まず第一に両家系間の密接な主従関係と乳兄弟の関係，及び'Alī ShīrとSulṭān Ḥusaynの乳兄弟の関係と幼少時の交流(マクタブの同窓生)に見出すべきであると言えよう。

次に，'Alī Shīrの経歴であるが，これについてはБартольдの古典的研究が未だ高い価値を持っている。そこで，この先行研究に依拠しつつБартольдが利用できなかったMAでその欠を補い，略年譜形式で'Alī Shīrの経歴を示すと以下のようになる。

1447年3月12日Shāh Rukhが没するとホラーサーンの政情が混乱，'Alī Shīrは父親に連れら

---

5) ティムール朝時代のそのような有力家系の例については，信頼度の高い邦文の研究を参照できる[安藤 1985；間野 1977]。

6) Waqfīyaについては，既に川本正知氏が研究を進めておられ，先の研究発表等の場で重要な点を幾つも御教示いただいた。ここに記し，改めて氏に感謝する。

れてシーラーズに行き，この地方に数年留まる[MA：177 b]。

1454年から1456年10月の間に Sulṭān Ḥusayn と共に Abū al-Qāsim Bābur(Shāh Rukh の孫；ホラーサーン統治1449-57)の臣下となる。

1457年3月に Abū al-Qāsim Bābur がマシュハドで没し，Sulṭān Ḥusayn は別のティムール朝王子と合流するためにメルヴに向かうが，'Alī Shīr はマシュハドに留まって就学する。

1464年から1466/67年の間に第7代君主 Abū Sa'īd(在位1451-69)治下のヘラートに戻り，Abū Sa'īd 麾下のアミールの下僕(nawkar)として日々を過ごす[MA：160 a, 166 b]。

1466/67年以降にサマルカンドに行き，二年間ハーネカーで学ぶ一方，二人の有力アミールの保護を受ける。

1469年4月 Sulṭān Ḥusayn のヘラート占領(3月)を知ってヘラートに行き，Sulṭān Ḥusayn の臣下となる。翌1470年 Muḥammad Yādgār(Shāh Rukh の曾孫)が一時期(7-8月)ヘラートを占領するが，その間も Sulṭān Ḥusayn と行動を共にする。最初の地位は印璽官で，すぐこれを辞して単なる近習となる。

1472年2月中央ディーワーンのアミール(amīr-i dīwān-i a'lā)となり，ディーワーンにおいて勅書(nishān)に印を捺すことが職務となる[MA：165 a-b]。

1476/77年 Mawlānā Nūr al-Dīn 'Abd al-Raḥmān Jāmī の勧めで，当時最も良く知られた神秘主義教団であるナクシュバンディー教団に入る。

1479年10月反乱者 Abū Bakr(第7代君主 Abū Sa'īd の子)の首が Sulṭān Ḥusayn 不在のヘラートに届いたとき，'Alī Shīr がヘラートの統治者(ḥākim)を務めていた(在任期間不明)。

1487年既にアミールの地位を退いていた 'Alī Shīr がアスタラーバードの統治者に任じられる(約2年在任)[MA：144 b]。これは Sulṭān Ḥusaynが自身の政府において，イラン系高官 Khwāja Majd al-Dīn Muḥammad の権限拡大を図ったためであり，'Alī Shīr にとっては左遷を意味した。

1488年末か1489年初め反逆の疑いを晴らすためヘラートに戻って Sulṭān Ḥusayn に釈明する。この機会に'Alī Shīr はアスタラーバードの統治者の地位を退き，アミールの地位からも再度退いてヘラート居住を許される。

1497年から1499年の間，二度の戦闘にまで悪化した Sulṭān Ḥusayn とその子 Badī' al-Zamān の対立において，仲裁者の役割を果たす。

以上の経歴から明らかなように，'Alī Shīr は1469年に Sulṭān Ḥusayn の臣下となって以来，それまでとは比較にならない高い地位と政治的実力を獲得した。1488/89年にアミールの地位を再度退いて後は公式の地位を保持しなかったが，それでも彼は宮廷の実

力者であり続けた。むしろ「アミールの地位を放棄したことによって日ごとに名望と尊厳が増し」，その頃 Sulṭān Ḥusayn が使い始めた，'Alī Shīr を指す「スルターン陛下の親近(muqarrab al-ḥaḍrat al-sulṭānī)」という表現[ḤS：184]は，'Alī Shīr に与えられた名誉称号の如く ḤS, KhA, MA に頻出し，彼が Sulṭān Ḥusayn の他の臣下とは一線を画すべき存在であったことを裏付けている。そもそも 'Alī Shīr は Sulṭān Ḥusayn の臣下というより「むしろその友人」と見なされており[BN：170 b]，「Sulṭān Ḥusayn Mīrzā は Mīr 'Alī Shīr に忠誠(irādat)を表明し，ミールを自らの師(pīr)と呼んでいた」程であった[BW：586][7]。'Alī Shīr のSulṭān Ḥusayn 宮廷における実力は，公式の地位ではなく，主従関係を越えた両者の親密な関係に基づいていたのである。それ故，彼には公式の高い地位に執着する必要はなく，そうすることはむしろ，部族社会の原理によって自身の立場を弱める危険性を伴った[Subtelny 1980：803]。'Alī Shīr はこの君主との親密な関係を，自身がアスタラーバードの統治者に任じられていた僅かな期間を除いて，没時(1501年1月3日)まで維持することに成功した[8]。

先に述べたように，'Alī Shīr がSulṭān Ḥusayn 宮廷の実力者となり得た要因は第一に両者の乳兄弟の関係と幼少時の交流，及びそれに先立つ両家系間の密接な主従関係と乳兄弟の関係に見出されるが，そこから予想される以上の親密な関係が両者の間に成立し，その関係は，当時の宮廷にありがちな抗争や軋轢にも余り左右されず[9] 'Alī Shīr の没時まで維持されたのである。トルコ系軍人であるにも拘わらず学識と教養を身に付け，敬謙で世俗の官職に執着しない 'Alī Shīr に対し，Sulṭān Ḥusayn からの信頼は厚かったようである。

このように君主 Sulṭān Ḥusayn との間に主従関係を越えた親密な関係を維持して宮

---

7) BW の記事は 'Alī Shīr が Sulṭān Ḥusayn に「トルコ語のハムサ」を献呈したときの逸話の中に見られ，'Alī Shīr のハムサ完成は1484年のことであるから[Семенов 1960：240]，その頃の状況を伝えていると思われる。

8) 'Alī Shīr 没時における Sulṭān Ḥusayn の悲嘆の様子や，哀悼の意を表する行為は，MA で詳述されている[182 b-184 b]。尚，'Alī Shīr のアスタラーバード赴任にまつわる事情について，やや問題はあるが，最近，新たな解釈が提示された[Subtelny 1988 b]。また，アスタラーバード赴任を左遷ではないとする見解もあるが[Семенов 1960：241-3]，さすがにこれは承服し難い。

9) アスタラーバード赴任の際の事情を別にして，'Alī Shīr は少なくとも二度，讒言による危機を切り抜けている[Бартольд 1928：243-5]。

廷の実力者であり続けた ‘Alī Shīr は，当然予想される如く，顕著な経済的実力の持ち主であった。‘Alī Shīr の経済的実力は彼の様々な活動から窺うことができる。後述する学芸保護は別にして，それらを簡単に見ておこう。

まず第一に ‘Alī Shīr による種々の建設活動が注目される。後述する宗教・教育施設以外でも，彼がホラーサーン各地に建設，あるいは修復したものとして，リバート51，貯水池19，橋梁16，公衆浴場 9 の名を挙げることができる[MA：146 a-147 a]。勿論建築・修築の全経費を ‘Alī Shīr が受け持ったとは限らず，新規建設と修復では随分事情が異なり，施設維持のためのワクフ物件についても殆どの場合不明である[10]。しかし，諸史料の記述から判断する限りでは，‘Alī Shīr の建設活動は君主 Sulṭān Ḥusayn の建設活動を上回る程のものである[11]。‘Alī Shīr の建造物の中で，ほぼ間違いなく全建築費と総てのワクフ物件を ‘Alī Shīr 個人が提供したと思われるものに，有名なイフラースィーヤの建造物群があるが，彼自身の言葉によると，この建造物群に寄進したものは「私の所有であり，売買の際にシャリーアの諸規定が完全に遵守された」という「ヘラート市内やその周辺にある諸店舗，果樹園，貯水池，一般的種々不動産(mustaghallāt)」である[Waqfīya：xxi]。また，TSh(1487年完成)の著者は，‘Alī Shīr が「私有財産(khāliṣ amwāl)」を諸慈善建造物のために費やしたと述べ，「彼がそれらの建造物に定めた寄進財産」を約500ケペキー・トマン相当と見積もっている[571][12]。‘Alī Shīr の建設活動が自身の莫大な「私有財産」，特に売買等で獲得した「不動産」に基づいていたことは確かであろう。

次に，建設活動以外の慈善行為からも ‘Alī Shīr の経済的実力を窺うことができる。比

---

10) 当時のヘラートの慈善施設の中には，文献史料で建設者・復興者とされていない人物によるワクフ物件追加の例があり，また，後代の史料に拠るが，建設者以外の人物が建設費の一部を受け持った例がある[Allen 1981：145, 177]。

11) この点は先述の研究発表の際，レジュメの中でごく簡単に示しておいた[『イスラムの都市性・研究報告』研究報告編・第35号：27]。

12) 当時の物価や貨幣単位については，今後の研究の進展に負わねばならない部分が大きいが，500ケペキー・トマン，即ち500万ケペキー・ディーナールという額に一応の目安を示しておくと，当時二つのマドラサで教授職を兼任していたウラマー(後出：表Ⅰ-No. 1)が余り無理なく購入できる「邸宅(sarāy)」の値段が3000ケペキー・ディーナールであり[MA：170 a]，シャイバーン朝の Shaybānī Khān のヘラート占領時に住民から徴収された「安全保障金と献上金の額」が81万ケペキー・ディーナールであった[久保 1988：134]。

較的小規模な慈善行為の事例は枚挙に暇がないが，加えて，'Alī Shīr にはヘラート住民全体を一挙に保護できるだけの経済力があった。Sulṭān Ḥusayn の「財務官僚たち(dīwāniyān)」が住民に多額の「臨時税(ikhrājāt)」を課そうとした時，何度も 'Alī Shīr が「臣民が苦しまないよう，自身の私有財産(khāṣṣa)からその額を支払った」というのである[MA：171 a-b]。MA で挙げられている事例は，1500年夏/秋マーザンダラーン遠征中の Sulṭān Ḥusayn のもとから「ヘラートの町と近郊諸地域(bulūkāt)の住民から10万ケペキー・ディーナールの額を徴収する[13]」ことを命じた勅令が届いた時，「ヘラート市内の住民」から徴収する予定であった5万ケペキー・ディーナールを 'Alī Shīr が自身の「私有財産(khāṣṣa)」から支払ったというものである[171 b]。

更に 'Alī Shīr は，当時の支配階級，即ち君主とその一族や宮廷に属する人々までも経済的に援助し得た。Sulṭān Ḥusayn が遠征に赴くときは必ず「相当額(mablagh-i bisyār)」を君主と王子たちへの「贈物として」献上し，「アミールたち，ワズィールたち，サドルたち，近習たちのみならず王の軍の全従者」に「賜餐」を提供し，軍の帰還時においても同様のことをしたという[MA：171 a]。その事例としては，1497年 Sulṭān Ḥusayn がバルフ遠征から帰還してカンダハール遠征に向かった時に，大量の「銀」，「絹」，「穀物」を Sulṭān Ḥusayn に献上し，更に約10万ディーナール[14]を君主の妻妾たちと息子たち，及びアミールたちと重臣たちに与えたことが挙げられる[MA：171 a]。また，'Alī Shīr は多くの「耕地」や「カナート」を Sulṭān Ḥusayn とその妻妾たちや息子たちに献上し，Sulṭān Ḥusayn の訪問を受けると必ず「数え切れない現金」，「馬」，「貴重な品や高貴な贈物」を差し出したという[MA：170 b-171 a]。具体的な事例では，アスタラーバードの統治者であった王子 Badī' al-Zamān(在任1490-96)に，自身の「所有地(mutamallakāt)」に属する同地方の「一つの村」を献上したこと，1499/1500年マシュハドの統治者であった王子 Muḥammad Muḥsin に対し，「サブザヴァールで所有していた総ての穀物」を献上したことが挙げられる[MA：168 b-169 b]。

以上のように，様々な形で窺える 'Alī Shīr の経済的実力は瞠目に値するものであり，彼が莫大な私有財産の持ち主であったことは疑いを容れない。特に 'Alī Shīr の所有す

---

13) 10万ケペキー・ディーナールという臨時税の額は，先に示した目安(注12)から言うと，極めて現実的な数字である。

14) 単なるディーナールとケペキー・ディーナールとの対価は，1ケーペキー・ディーナール＝3ディーナール；6ディーナール；9ディーナールの，少なくとも三通りの可能性がある[Fragner 1986：559]。

る大小様々な不動産は，ヘラートとその近郊諸地域に止まらず，アスタラーバードやサブザヴァールにも存在していたのである。'Alī Shīr が莫大な私有財産を獲得した経緯を跡付けるのは難しいが，同時代史料に近い価値をもつ TR は「['Alī Shīr は]アミールであった時に努力して不動産(milk)や家財(asbāb)を整え，毎日の彼の不動産(amlāk)からの収益は18,000シャールヒー[15] になる程であった」と伝え[129 b]，彼がアミールであった時の収入(恐らく封土からの収益や国庫からの給与)を活用して莫大な不動産を獲得したことを示唆している。また，'Alī Shīr は1475/76年[16] Sulṭān Ḥusayn から「土地(zamīn)」の「下賜('ināyat)」を受けており[Waqfīya：xxi]，この例に限らず彼は頻繁に王族から何らかの「下賜」を受けていたようで，「下賜されたもの('ināyatlār ; in'āmlār ; sāchīq)」への感謝を，何通もの書簡の中で述べている[Munsha'āt：35, 40, 63, 73, 77][17]。更に，先に検討した彼の出自や経歴を勘案すれば，'Alī Shīr の莫大な私有財産は，彼がアミールであった時の収入の活用，並びに君主や王族からの下賜，そして(あったとしても)ごく僅かな世襲財産に基づくものと見なすことができよう[18]。

恐らく 'Alī Shīr は，君主 Sulṭān Ḥusayn との親密な関係によって，他の臣下より多くの俸給や下賜を受け，王族以外では些か突出した分量の私有財産を獲得したのであろう。

---

15) シャールヒーは Shāh Rukh 時代4.72gm に規格化された銀貨であるが，同じく銀貨のケペキー・ディーナールが約 8 gm なので[Fragner 1986：558-9]，TR に挙げられている数字は，一日当たりの収益として余りにも大き過ぎる。

16) 本稿で用いた Waqfīya(ペルシア語抄訳)では，A.H.880(1475/76)年となっているが，より原文に近いと思われるウズベク語訳では A.H.881(1476/77)年となっているようである[Subtelny 1988 a：491 ; 1988 b：140]。

17) 厳密には上表文('arḍa-dāsht)の中に見られる。Munsha'āt 所載の上表文には宛名が記されていないが，ティムール朝王族，特に Sulṭān Ḥusayn 宛と思われるものが多く，王子 Badī' al-Zamān 宛と確定できるものも二通ある[51-60]。尚，本稿で Munsha'āt を利用し得たのは安藤志朗氏と川本正知氏の御好意による。

18) 父親が一時期サブザヴァールの統治者であったので(注 4)，サブザヴァールで保持していた財産だけは，世襲のものという可能性が残されている。
尚，'Alī Shīr が「ミールザー[Sulṭān Ḥusayn]からは何一つ取らなかった」という問題の記事[BN：171 a]について，Subtelny は"俸給や給与としては"「何一つ取らなかった」と補って考えているが[Subtely 1988 a：491]，更に補って，'Alī Shīr がアミールの地位から退いた後の状況を伝えていると考えるのが最も適当であろう。

しかし，王族と比較した場合，彼の経済的実力の評価は微妙な問題になり，少なくとも，君主に匹敵するような経済的実力を認めることはできない。何故なら，'Alī Shīr が経済的に余力を残して上述の様々な活動を行なったのではないからである。'Alī Shīr の被保護者 Khwāndamīr は，「筆者 [Khwāndamīr] は，決して一年で閣下の財庫にザカート[19] が必要な程の現金が蓄積されることはなかったと確信している」と述べ，その理由として「彼の従者たちの手に入っていた物」も「様々な人々への下賜」や「諸建造物の建設」の経費に匹敵することを挙げている [MA：151 a]。「従者たち」への手当は本稿Ⅲで述べるように彼の学芸保護活動の経費と不可分である。つまり，'Alī Shīr の様々な活動の華々しさは，喜んで自身の収入を使い切るという姿勢，換言すれば，現世における蓄財を拒否するという，散財の美学に基づいていたのである[20]。

以上，'Alī Shīr の出自，経歴，及び経済的実力について再検討した。予備作業としては些か紙幅を費やし過ぎたかもしれないが，これらの検討により，当時の社会において彼の占めた位置を，先行研究以上に正確に把握し得たものと考える。これを前提として次章以下 'Alī Shīr による学芸保護活動について考察する。

Ⅱ

先に述べたように，'Alī Shīr は君主 Sulṭān Ḥusayn をも凌ぐ程華々しく建設活動に従事し，様々な慈善建造物をホラーサーン各地に数多く建設，あるいは修復した。それら種々建造物の機能は，設定されたワクフ物件の収益によって維持され，マスジドやマドラサでは，職員たるウラマーへの俸給，マドラサの場合には学生への手当も支給されていた。そこで本稿では，ウラマーその他諸学者の保護・育成に関わる諸施設を宗教・教育施設と総称し，'Alī Shīr による宗教・教育施設の建設や修復を，彼の学芸保護活動の一環として捉える[21]。少なくともマドラサとハーネカーの建設については，同時代人も同様の捉え

19）当時は，モンゴル時代に導入された商税（タムガ税）もザカートと称されていたが，ここで言うザカートは，本来の救貧税であろう。

20）これは 'Alī Shīr が財産を残すべき「息子も娘も妻も家族も持たなかった」[BN：171 a] ことと深く関係するであろう。しかし，兄弟や親族の存在は確認できるので，彼の純粋な信仰心や学芸振興への情熱も重視しなければならない。

21）勿論財産保護形態としてのワクフの問題も検討すべきであろうが，繁雑を避けるため，本稿ではこの問題に触れない。

方をしており,「['Alī Shīr は]学識あるウラマーや尊敬すべき学識者たち(fuḍalā')の尊厳の増大と地位の向上のために可能な限り努力し尽力して,学生たちや在任者たちの安寧と平穏のためにマドラサやハーネカーを建設した」と述べている[MA：132 b]。

それでは 'Alī Shīr は,どのような宗教・教育施設をどの程度建設,あるいは修復したのであろうか。ここで,ウラマーその他諸学者の保護・育成に関わる当時の諸施設を概観しておかねばなるまい。イスラーム世界に広く存在し,かなり画一的な形態が認められるマスジトとマドラサは除いて[22],以下,当時の宗教・教育施設を挙げ,簡単に解説する。

まずハーネカーであるが,当時のハーネカーを単一に神秘主義者たちの修道場と解することはできない。多くのハーネカーがマドラサと対になって建設され,マドラサと同様,学生たちが教授のもとで学んでいたのである。しかも,ハーネカーの教授や学生とマドラサの教授や学生との間には,本質的な差異は無く,このようなハーネカーはマドラサとほぼ同じ機能を有している[Allen 1981：147]。ただ,ヘラートにおける幾つかの例から判断すると,マドラサとは違って毎日「貧者」,「困窮者」,「孤児」,「ダルヴィーシュ」に食事を与え,時には衣類も与えるという活動が見られる[KhA(Ⅰ)：466 a, 467 a, 467 b ; MA：145 b]。一方,マドラサではなく高名な神秘主義者や聖者の廟,即ちマザールに接して建設されたハーネカーは随分性格が異なると思われる。しかし,「マザールの端のハーネカー(khānaqāh-i sar-i mazār)」と称される,そのようなハーネカーにおいてさえ,マドラサで修学した人物が教授に任じられた例がある[KhA(Ⅰ)：469 a]。

続いてマザールに関連するものとして,史料中 'imārat-i sar-i mazār, gunbad-i sar-i mazār, langar-i sar-i mazār と称される諸建造物が挙げられる。「マザールの端のハーネカー」も含め,これら諸建造物各々の用途を明確にすることはできないが,いずれにしてもマザールと不可分の施設と思われるので,被埋葬者の子孫等が任じられるマザールの「シャイフ・ワクフ物件の管財人」や,神秘主義者たちの活動の場と見なすことができよう。しかしヘラートでは,このような施設においてさえ,ウラマーに教授職が与えられた例がある[KhA(Ⅱ)：301 b]。尚,マザールの「シャイフ・ワクフ物件の管財人」は「行き来する者たちに対する歓待」に従事しており[ḤS：323, 329, 338],上述の諸建造物は巡礼者や旅行者への慈善の場でもあったと思われる。

この外には,dār al-ḥadīth, dār al-ḥuffāẓ, dār al-siyāda, ḥaẓīra, dār al-shifā', が挙げ

---

22) 同時代の中央アジアや,やや時代の遡るイランにおけるマスジドやマドラサの機能・運営については,ワクフ文書を材料とした邦文の詳しい研究を参照できる[岩武 1989 ; 川本 1989]。

られる。dār al-ḥadīth はヘラートにおいて一例確認されるだけで，その機能に関する情報はないが，14世紀のヤズドに見られる例[岩武 1989：28-9]から推して，ハディース学教育の場であり，ハディース学者の保護・育成に貢献したと考えて間違いなかろう。dār al-ḥuffāẓ については，'Alī Shīr の建設したものが「その中で美声のコーラン読みたちがコーランを朗唱する」とされている[Waqfīya：xxi]ことから，その名の通り，ハーフィズたちが集まって職務に従事していたと考えられる。次に，dār al-siyāda と ḥaẓīra は，本来教育活動の場ではないと思われるが[23]，当時のヘラートではウラマーが「教育」に従事し「教授」を務めている[ḤS：346；KhA(Ⅰ)：466 a, 469 a]。最後に dār al-shifā' つまり"病院"であるが，当時の病院の勤務医は「病人の治療」に加えて「教育」，即ち「医学書の講義」をもその職務としていた[KhA(Ⅰ)：475 b；(Ⅱ)：307 b；MA：133 a]。

マドラサやマスジドに加えて，以上のような宗教・教育施設が当時のウラマーその他諸学者を保護・育成し，イスラーム諸学や医学の発展に寄与していたと考えられる。'Alī Shīr はこれら諸施設の建設活動に積極的に取り組んだ。彼が建設，あるいは修復した宗教・教育施設はホラーサーン各地に多数存在するが，まずヘラートにおいて建設，あるいは修復した諸施設に注目し，逐一名を挙げる繁雑を避けて施設の種類と数のみを示す。典拠は KhA 中のヘラートの建造物リスト[(Ⅰ)：463a-469b；(Ⅱ)：299b-303b]と MA 中の 'Alī Shīr の建造物リスト[145 b-147 a, 151 a]であるが，参照の便を考え，Allen 1981の通し番号を(　)内に示しておく[24]。

マスジド	16	：建設 5 (421, 430, 435, 441, 442)；修復 2 (427, 428)
		建設・修復の別不明 9 (Allen 1981になし)
マドラサ	2	：建設 1 (413)；修復 1 (477)
ハーネカー	4	：建設 3 (413, 517, 522)；修復 1 (580[25])
'imārat	5	：建設 4 (534, 573, 599, 612)；修復 1 (605)

23) 本来 dār al-siyāda はサイイドのための慈善施設，ḥaẓīra は墓地と思われる[岩武 1989：27；Golombek-Wilber 1988：50]。尤も，dār al-siyāda の場合は，当時のヘラート以外でも教育施設として利用された例がある[岩武 1989：注24]。

24) 但し，不完全な KhA のテキストを利用したためか，Allen はNo. 539の解説において'Alī Shīr による修復に言及していない。

25) Allen は ḥaẓīra として扱っているが，KhA と MA の記述によって，'Alī Shīr が修復したのはハーネカーであると判断した。

langar　1：修復1(539)
dār al-ḥadīth　1：修復1(524)
dār al-ḥuffāẓ　1：建設1(525)
dār al-shifā'　2：建設1(527)；修復1(528)

次に，ヘラート以外の地域における宗教・教育施設については，殆どの場合建設・修復の別が明確ではないので，所在地，種類，数のみを列挙する。そうすると，フーシャンジュ(マスジド 1)，エスフェザール(マスジド 1)，ジャーム('imārat 1[26])，グール(マスジド 1)，メルヴ(マドラサ 1；'imārat 1；langar 1)，サラフス(マスジド 1)，マシュハド(dār al-ḥuffāẓ 1)，トルシーズ(マスジド 1)，ニーシャープール(ハーネカー 1)，アスタラーバード(マスジド 1)となり，Sulṭān Ḥusayn の領土全域に分布していることがわかる[MA：146 a, 151 a]。

勿論，これら諸施設の建設・修復の際，建設の場合の全建築費と全ワクフ物件，並びに修復の場合の全修築費と増補分の全ワクフ物件が，'Alī Shīr の私有財産のみで賄われたとは限らない。しかし，少なくとも建設の場合は，施設の種々職員や学生が結果的に設立者 'Alī Shīr の恩恵に浴したことになり，更には 'Alī Shīr が職員の任免や学生の人選に直接関与したということも十分に考えられる。また，修復の場合でも，ヘラート所在の5施設(Allen 1981：No.477, 524, 525, 580, 605)については 'Alī Shīr による運営改善が窺われ，いずれも単なる「修築(tajdīd)」ではなく 'Alī Shīr の努力による「繁営(ma'mūrī wa ābādānī；rawnaq wa rawāj)」や 'Alī Shīr による職員任命が伝えられている[KhA(Ⅰ)：469 a；(Ⅱ)301 a-b]。中でも興味深いのは Khānaqāh-i sar-i Mazār-i Khwāja 'Abd Allāh Anṣārī の場合で，1498/99年この施設の「清掃人(jārūbkash)」となった 'Alī Shīr が，新たに教授，ハティーブ，ムアッズィン各1名を任命し，ハーフィズ数名にも職務を与え，「それらの人々全員の俸給」を「自身の私有財産(khāliṣ amwāl)」から支払ったという[KhA(Ⅰ)：469 a]。

そこで次に，'Alī Shīr が建設した諸施設の職員や学生，更には 'Alī Shīr が運営を改善したと見なせる上述諸施設の職員や学生を諸史料から可能な限り抽出してみることにする。当然，修復の場合は 'Alī Shīr による修復後の職員や学生に限ることにし，また，建設・修復どちらの場合も，'Alī Shīr 存命中の職員・学生に限定した。こうして作成したのが表Ⅰである。地域的には専らヘラート所在の諸施設に的が絞られることになる。

---

26) これだけは KhA や MA ではなく TSh に拠った[571]。尚，この建造物は langar/langur とも呼ばれている[Golombek-Wilber 1988：327；O'Kane 1987：283]。

表 I

Madrasa-yi Ikhlāsīya(建設；Allen 1981：No.413)

No	職務	人名	出身地や 'Alī Shīrとの関係	典拠
1	教授	A.Burhān al-Dīn 'Atā' Allāh Nīshāpūrī	ニーシャープール出身，'A.Sh.が保護，'A.Sh.への献呈著書	HS353;KhA(I)473a MA132b,140a
2	教授	A.Murtād*	同マドラサで修学	HS349;KhA(I)473b;MA132b
3	教授	M.Faṣīh al-Dīn Muhammad al-Nizāmī	ヘラート出身，'A.Sh.の師，'A.Sh.への献呈著書	HS352-3;KhA(I)474a MA133a-b;MN123
4	教授	M.Kamāl al-Dīn Mas'ūd Shirwānī	シルヴァーン出身，'A.Sh.への献呈著書	HS343;KhA(Ⅰ)474b MA134a;MN101
5	教授	Mawlānāzāda-yi M. 'Uthmān	サマルカンド出身，'A.Sh.が保護	HS340-1;KhA(Ⅱ)306b
6	教授	Q./A.Ikhtiyār al-Dīn Ḥasan Turbatī	ザーヴェ出身，'A.Sh.の厚意により教授，後にヘラートのカーディー，'A.Sh.への献呈著書	HS355-6;KhA(I)473b MA132b,142b
7	教授	Q./M.Nizām al-Dīn Muhammad	ファラー出身，後にヘラートのカーディー	HS339-40;KhA(Ⅱ)306a-b
2	学生	A.Murtād	後に同マドラサで教授(既述)	
8	学生	A.Nizām al-Dīn Mashhadī*	Khānaqāh-i Khalāṣīya(後出)でも修学，後にヘラートの別のマドラサで教授	KhA(I)473b
9	学生	M.Abū Ṭāhir	バダフシャーン出身	MN77
10	学生	M.Asad Allāh	セムナーン出身	MN90
11	学生	M.Ghiyāth al-Dīn Bahrābādī	後にヘラートの別のマドラサで教授	KhA(I)475a
12	学生	M.Hājjī Muhammad Tabrīzī	後にヘラートのハーネカーの一つで教授	HS358;KhA(I)475a
13	学生	M. 'Isām al-Dīn Ibrāhīm	後にヘラートの別のマドラサで教授	HS358;KhA(Ⅱ)311a
14	学生	M.Kamāl al-Dīn A.Ḥusayn Mu'ammā'ī	ニーシャープール出身，'A.Sh.への献呈著書	HS343;KhA(Ⅱ)307b MA140a;MN109
15	学生	M.Murshid al-Dīn 'Abd Allāh	シーラーズ出身，'A.Sh.が保護，後にヘラートのḥazīraの一つで教授	HS606
16	学生	M.Nizām al-Dīn Shāh 'Alī	後に'A.Sh.の従者(ナーイブ)となる	BW577;KhA(I)477b; MN91
17	学生	M.Nūr al-Dīn Muhammad Ziyāratgāhī	後にヘラートの別のマドラサで教授	HS347
18	学生	M.Shams Allāh*	Khānaqāh-i Khalāṣīya(後出)でも修学，後にヘラートの別のマドラサで教授	KhA(Ⅱ)311a
19	学生	M.Shams al-Dīn Barda'ī*	後にKhānaqāh-i sar-i Mazār-i Kh. 'Abd Allāh Anṣārī(後出)で教授	HS358;KhA(I)469a
20	学生	M.Shams al-Dīn Muhammad al-Ḥanafī	後にヘラートの別のマドラサで教授	HS359-60;KhA475a
21	学生	M.Shihāb	'A.Sh.がマドラサの一室を与える	KhA(Ⅱ)313a

Madrasa-yi Nizāmīya(修復；Allen 1981：No.477)

22	教授	A.Burhān al-Dīn b.A.Sayyid Asīl	'A.Sh.の厚意により教授となる	KhA(I)473a-b; MA133a
23	教授	M.Karīm al-Dīn Dasht-i Bayādī		MA133a

Khānaqāh-i Khalāṣīya(建設 ; Allen 1981 : No.413)

24	教 授	A.Jamāl al-Dīn 'Aṭā' Allāh	'A.Sh.が保護, 'A.Sh.への献呈著書	ḤS358-9;KhA(I)472a MA133a-b
25	教 授	A.Ṣadr al-Dīn Ibrāhīm Mashhadī		ḤS352;KhA(I)473a;MA133a
26	教 授	Kh. 'Imād al-Dīn 'Abd al-'Azīz Abharī	'A.Sh.への献呈著書	ḤS349;KhA(I)474b;MA133a-b
27	教 授	M.Burhān al-Dīn 'Aṭā' Allāh al-Rāzī	ヘラート出身	ḤS341;KhA(Ⅱ)306b;MN101
28	教 授	M.Ḥalīl Allāh b.M.Fāḍil	'A.Sh.が保護	ḤS343;KhA(I)474b
29	シャイフ	Ḥ.Jalāl al-Dīn Maḥmūd*	Masjid-i Jāmi'-i 'A.Sh.(後出)では イマーム・ハティーブを務める	MN113;BW566
30	シャイフ	M.Shams al-Dīn Muḥammad Nigarān	ウラマー, 'A.Sh.の従者	KhA(I)478a
31	学 生	A.Ḥusayn	マシュハド出身	MN92
8	学 生	A.Niẓām al-Dīn Mashhadī	Madrasa-yi Ikhlāṣīyaでも修学(既述), 後にヘラートのマドラサの一つで教授	
32	学 生	M. 'Abd al-Mu'min	サマルカンド出身	MN135
33	学 生	M.Ḥaydar	後にジャームで教授	KhA(I)475a
34	学 生	M.Muntahī	後にヘラートのマドラサの一つで教授	KhA(Ⅱ)311a
18	学 生	M.Shams Allāh	Madrasa-yi Ikhlāṣīyaでも修学(既述), 後にヘラートのマドラサの一つで教授	
35	学 生	M.Ṭāhir		KhA(I)475a

Khānaqāh-i sar-i Mazār-i Kh.'Abd Allāh Anṣārī(修復 ; Allen 1981 : No.580)

19	教 授	M.Shams al-Dīn Barda'ī	Madrasa-yi Ikhlāṣīyaで修学(既述), 'A.Sh.が任命	

Khānaqāh-i sar-i Mazār-i M.Shams al-Dīn Muḥammad al-Tabādgānī(建設 ; Allen 1981 : No.517)

36	シャイフ	M.Ḥamīd al-Dīn Tabādgānī	神秘主義者(マラーマティー),被埋葬者の 子, 父親の友人'A.Sh.が保護・任命	ḤS335-6;KhA(Ⅱ)310b MN106-7

Dār al-Shifā'-i 'Alī Shīr(建設 ; Allen 1981 : No.527)

37	教 授	M.Ghiyāth al-Dīn Muḥammad Ṭabīb	'A.Sh.への献呈著書	KhA(I)475a-b MA133a,134a,140a
38	及	M.Muḥammad Mu'īn	後に'A.Sh.の厚意により宮廷医となる	KhA(Ⅱ)305b
39	び	M.Muḥammad Ṭabīb		KhA(I)475b
40	臨 床	M.Niẓām al-Dīn 'Abd al-Ḥayy Ṭabīb	Kh.Aḥrārの治療のためサマルカンドへ, ヘラート帰還後は宮廷医, 'A.Sh.の従者	ḤS342;KhA(Ⅱ)313b
41	医	M.Quṭb al-Dīn Ādam		ḤS342;KhA(Ⅱ)307b

Dār al-Shifā'-i Mahd-'Ulyā Milkat Aghā(修復 ; Allen 1981 : No.528)

42	同 上	M.Darwīsh 'Alī Ṭabīb	'A.Sh.が保護, 'A.Sh.と極めて親密な関係, 'A.Sh.への献呈著書	KhA(I)475b;MA134a,184b

Masjid-i Jāmi'-i 'Alī Shīr(建設 ; Allen 1981 : No.430)

29	イマーム・ハティーブ	H.Jalāl al-Dīn Maḥmūd	Khānaqāh-i Khalāṣīyaではシャイフ(既述)	
43	イマーム・ハティーブ	Kh.H. Muḥammad	ウラマーであって能書家, 'A.Sh.の図書館で書写に従事	KhA(I)479a;MA179a-b
44	ワーイズ	M.Kamāl al-Dīn Ḥusayn al-Wā'iẓ al-Kāshifī*	サブザヴァール出身, 常に'A.Sh.が保護, 'A.Sh.への献呈著書, Mazār-i Kh. Abū al-Walīd Aḥmad(後出)でもワーイズ	ḤS345;KhA(II)310a MA133b;MN104

['Imārat-i sar-i]Mazār-i Kh. Abū al-Walīd Aḥmad(建設 ; Allen 1981 : No.573)

45	シャイフ	M.Kamāl al-Dīn Shāh Ḥusayn Kāmī	オウベ出身, 'A.Sh.の従者(マフスース)	ḤS360;KhA(I)478a; MN67
44	ワーイズ	M.Kamāl al-Dīn Ḥusayn al-Wā'iẓ al-Kāshifī	サブザヴァール出身, 常に'A.Sh.が保護, 'A.Sh.への献呈著書, Masjid-i Jāmi'-i 'A.Sh.でもワーイズ(既述)	

• 略号一覧 : A.=Amīr(表中のこの語は軍人の地位を表すのではなく, 著名なサイイドへの尊称)
H.=Ḥāfiẓ ; Kh.=Khwāja ; M.=Mawlānā ; Q.=Qāḍī ; 'A.Sh.='Alī Shīr
• 表左端の番号は通し番号で, 同一人物は同一番号になるようにした(人名末尾の*印は表中で後出する人物であることを示す)。

表Ⅰの宗教・教育施設のうち, 特に Madrasa-yi Ikhlāṣīya と, これと対になっている Khānaqāh-i Khalāṣīya の職員・学生が数多く確認され, 45名中33名までがこの二つの施設の職員・学生である。教授を務めているのは当時の高名なウラマーであり[27], 学生も20名中12名までが, 後にマドラサ等教育施設の教授, 即ち高位のウラマーに育ったことが確認できる。そもそも表に挙げた45名中, ウラマーが圧倒的多数を占め, Khānaqāh-i Khalāṣīya のシャイフを務めた人物(No.29, 30)ですら神秘主義者と言うよりもウラマーであり, 医師が6名と意外に多く確認できるが, 神秘主義者と確定できるのは唯一人(No.36)である。しかもこの神秘主義者(No.36)は, 自身にとって必要のない世俗の学問の習得に意欲を示していたという[MN : 107]。恐らくこれは, 純然たる神秘主義の劣勢と, ウラマー的要素と神秘主義者的要素が曖昧に入り混じった当時の知識人たちを象徴しているのであろう[28]。

表において Madrasa-yi Ikhlāṣīya と Khānaqāh-i Khalāṣīya の職員・学生の数が突出

27) No.2のウラマーを除いて, 同時に別の教育施設でも教授職を保持していた者たちである。尚, No.6, 24の二人については, 筆者の前稿における解説を参照されたい[久保 1988 : 152-3, 156]。

28) 当時のハーネカーの機能に関連して, 同様の指摘がなされている[Golomek-Wilber 1988 : 48 ; O'Kane 1987 : 23]。

しているのは決して偶然ではなく，建設活動による ‘Alī Shīr のウラマー保護を称える同時代人 Khwāndamīr も，この二つの施設を別格扱いしている[MA：133 a]。Madrasa-yi Ikhlāṣīya のワクフ文書(抄訳)によると，このマドラサは教授 2 名を含む合計12人のウラマーと22人の学生に俸給や手当を支給することになっている[Waqfīya：xxiii]。従って，ワクフ文書の設定通りにマドラサが運営されておれば，表Ⅰの21名以外にも相当な数のウラマーが保護・育成されたはずであるが，実は，このマドラサで保護・育成されたウラマーの数が，当初の設定からの予想を上回ることさえ十分に考えられる。と言うのも，当初のワクフ文書の設定に従えばこのマドラサの教授は常時 2 名であるが，1501年までには 4 名に増員されているのである[MA：132 b]。一方，Khānaqāh-i Khalāṣīya の場合はワクフ文書は参照できないが，教授の定員が1501年の時点で 3 名である[MA：133 a]。当時のヘラートには，外にもマドラサとハーネカーが対になって建設されている例が幾つかあるが，合計 7 人もの教授を擁するのは希で，最大規模と思われる君主 Sulṭān Ḥusayn のマドラサとハーネカーの合計 8 人(1499/1500年の時点)[KhA(Ⅰ)：467 a][29] に迫る。Madrasa-yi Ikhlāṣīya と Khānaqāh-i Khalāṣīya は当時の学問の中心ヘラートにおいても最大級の教育施設であったと言えよう。

表Ⅰで更に注目されるのは，‘Alī Shīr と直接何らかの関係や交渉を持ったと見なせる者が，45名中19名(No.1, 3, 5, 6, 15, 16, 19, 21, 22, 24, 28, 30, 36, 38, 40, 42, 43, 44, 45)に達することである。‘Alī Shīr への献呈著書執筆の背景に本稿Ⅲで述べるような直接的交渉を想定すれば，更に 4 名(No.4, 14, 26, 37)増えて計23名と全体の半数を越える。これらの者たちの内，6 名(No.1, 5, 28, 30, 42, 45)が就任以前に ‘Alī Shīr の被保護者あるいは従者であり，5 名(No.3, 6, 19, 22, 36)が ‘Alī Shīr の意思に基づいて就任したことが確認でき，また No.21の人物は ‘Alī Shīr によってマドラサの一室を与えられている。一方，就任後新たに ‘Alī Shīr の保護を受けた者(No.24)，退任後 ‘Alī Shīr の従者となった者(No.40)，就学開始後 ‘Alī Shīr に保護された学生(No.15)，修学後 ‘Alī Shīr の従者となった学生(No.16)などの存在も確認することができる。“‘Alī Shīr の従者”の実体は本稿Ⅲで詳述するが，要するに ‘Alī Shīr は，自身の被保護者や従者を就任させるなどして職員や学生の人選に関与すると共に，職員や学生の中から新たな被保護者や従者を選ぶことによっ

29) 筆者は先の研究発表の際，誤って，Sulṭān Ḥusayn のマドラサだけで 8 人の教授を擁していたと述べた[『イスラムの都市性・研究報告』研究報告編・第35号：17, 30]。この場を借りて訂正させていただく。

て，諸施設を自らの学芸保護活動に活用していたと考えられるのである。

'Alī Shīr のこのような姿勢は外にも幾つかの点から窺うことができる。ワクフ文書の設定によれば Madrasa-yi Ikhlāṣīya の教授2名は各々ハディース学と法学を受け持つことになっているが[Waqfīya：xxi]，表Ⅰに挙げた者たちの中でこれに確実に当て嵌まるのは No.6, 7 の二人(法学者)だけで，No.2, 3, 4は神学(kalām)，哲学(ḥikmat)，論理学(mantiq)，数学(riyāḍ)等で著名な者たちであり，No. 1 に及んでは韻律学('arūḍ)と詩(shi'r)で著名な人物であった[ḤS：343, 349, 352-3]。これは，先述の教授の増員という事情にもよるであろうが，'Alī Shīr の意図と無関係ではあるまい。また学生の場合でも，彼が No.21の学生にマドラサの一室を与えた理由は，この人物が，自身の愛好したムアンマー(韻文の謎掛)に秀でていたことにある[KhA(Ⅱ)：313 a]。更に，この場合は職員とも学生とも言えないが，極めて興味深い例として，'Alī Shīr が著名な史家 Mīrkhwānd (後出：表Ⅱ-No. 7)に Khānaqāh-i Khalāṣīya の一室を与え，史書 *Rawḍat al-Ṣafā'* の執筆を命じたという事実が挙げられる[KhA(Ⅱ)：307 a]。'Alī Shīr は自身の学芸保護活動のため，かなり柔軟に諸施設を利用したのである。

以上，'Alī Shīr による，建設活動を通じての諸学者保護育成活動について考察した。'Alī Shīr は Sulṭān Ḥusayn の領土全域で宗教・教育施設の建設・修復に従事し，中でもヘラートでは，当時の最大級の教育施設 Madrasa-yi Ikhlāṣīya と Khānaqāh-i Khalāṣīya を始め多くの施設の建設・修復を行い，特にウラマーの保護・育成に貢献した。しかも，これは確かに間接的な保護形態ではあるが，'Alī Shīr は，自ら建設，あるいは修復した諸施設を自身の学芸保護活動のため積極的かつ柔軟に利用していたのである。

尤も 'Alī Shīr は，宮廷における実力，君主 Sulṭān Ḥusayn への大きな影響力故か，自身が建設や修復に関わっていない宗教・教育施設をも学芸保護活動に利用できたようで，表Ⅰ-No.4, 6, 22のウラマー3名と，No.13の学生は，外ならぬ 'Alī Shīr の厚意により，上述諸施設以外のヘラートの教育施設において教授職を得ている[KhA(Ⅰ)：473 b, 474 b ; (Ⅱ)：311 a]。しかし，表Ⅰに挙げた者たち以外ではそのような例が確認できないので，恐らくこれは，上述諸施設における職員・学生枠が割けない場合や，上述諸施設での俸給だけでは不十分な場合[30]に限られるのであろう。

---

30) 注27で述べたように，表Ⅰに挙げた Madrasa-yi Ikhlāṣīya と Khānaqāh-i Khalāṣīya の教授たちは，一人を除いて，同時に別の教育施設でも教授を務めており(No. 2 のウラマーも Shaybānī Khān のヘラート占領後は二つのマドラサで教授)，No.22のウラマーも同様である。また，これら

Ⅲ

先述の如く，表Ⅰに挙げた45名の中に，'Alī Shīr と直接何らかの関係や交渉を持ったと見なせる者が少なくとも19名は存在する。これらの者たちは宗教・教育施設における俸給以外に，より直接的な形でも，'Alī Shīr の恩恵に浴したと考えられる。事実，表Ⅰ-No. 1 のウラマーは Madrasa-yi Ikhlāṣīya での在任中に，このマドラサへの通勤に便利な「邸宅(sarāy)」を「下賜(in'ām)」されており，この例に限らず 'Alī Shīr は「数え切れない程の」「庭園」や「住居」を「サイイド，ウラマー，学識者たち」に下賜したという[MA：170 a-b]。しかし，庭園や住居の下賜は一つの形に過ぎず，'Alī Shīr と被保護者の間には様々な形の交渉が想定され，また，宗教・教育施設の職員や学生以外にも多くの学芸の担い手が 'Alī Shīr の保護を受けている。そこで本章では，宗教・教育施設を介さない，'Alī Shīr と被保護者との直接的交渉を考察する。当然この考察の対象はウラマー保護に止まらず，ウラマー以外の学芸の担い手，即ち，文人，能書家，画家，演奏家などの保護育成活動をも含むことになる。

まず，表Ⅰに挙げた者たちを除いて，'Alī Shīr の保護を受けたと伝えられる学芸の担い手たちを諸史料の中から抽出してみよう。この作業のための格好の情報源が KhA にある。それは，'Alī Shīr の「恩寵と厚意を享受」して「自らを彼への祝福を祈る者に数え」，1499/1500年に存命中の「イスラーム教の偉人，傑出した大学者，著名な学識者や芸術家たち」の略伝集である[(Ⅰ)：471 a-481 a；(Ⅱ)：308 a-316 a]。この略伝集と他の諸史料の記述から 'Alī Shīr の被保護者と確定できる者を抽出し，KhA の略伝集に倣って分類した[31]のが表Ⅱである。但し，ヘラート在住でない者については史料からの情報が少なく，直接的交渉も想定し難いので，表には挙げなかった[32]。

の者に限らず，当時のヘラートにおいては，高名なウラマーが複数(多くても三つまで)の教育施設で教授職を兼任している例が数多く確認できる。彼らのウラマーとしての栄誉が，保持している教授職の数やそれに伴う収入によって表されていたのであろう。

31) KhA では被保護者全体が "akābir-i millat-i Islām wa…'ulamā'…wa…arbāb-i faḍl wa hunarmand" と表現され，「能書家(khwushniwīs)」，「画家(naqqāsh)・技師(muhandis)」，「演奏家(ahl-i sāz)」については，各々改めて標題が掲げられている。従って，本稿では「能書家」，「画家・技師」，「演奏家」という分類をそのまま採用し，残りの者たちを "ウラマー・文人" と総括した。

32) 二三例だけ挙げておくと，在シーラーズの著名詩人 Mawlānā Ahlī Shīrāzī は 'Alī Shīr への献

表Ⅱ

ウラマー・文人

No	人名	出身，身分，'Alī Shīrとの関係等	典拠
1	A.Ghiyāth al-Dīn b.Humām al-Dīn (Khwāndamīr)	ヘラート出身,歴史家,文章家, 'A.Sh.の従者(マフスース),献呈著書	BW29;MA142b-143a; MN106;TS108
2	A.Ibrāhīm Musha'sha'	Musha'sha'朝の王子,フーゼスターン出身, 詩人,能書家	KhA(I)472b;MN105-6
3	A.Kamāl al-Dīn Ḥusayn Gāzurgāhī	タバス出身,神秘主義者(マラーマティー), マザールのシャイフ,サドル,文人	BN176a;HS325;KhA(I)473a;MN107
4	A.Kamāl al-Dīn Ḥusayn Abīwardī	詩人,'A.Sh.の従者	HS350-1;MN110-1
5	A.Kamāl al-Dīn Ḥusayn 'Alī Jalāyr	詩人,軍人(アミール,クシュ・ベギ), 'A.Sh.が息子と呼ぶ, 'A.Sh.の従者(ナーイブ),献呈著書	BN174b;BW577;KhA(I)476a MA140a;MN126
6	A.Kamāl al-Dīn Sulṭān Ḥusayn	詩人	KhA(I)477a-b;MN127
7	A.Khwānd Muḥammad (Mīrkhwānd)	歴史家,文章家, 献呈著書('A.Sh.からの執筆依頼)	HS341;KhA(Ⅱ)306b-307a;MA142b MN106
8	A.Nizām al-Dīn 'Abd al-Qādir	マドラサ教授,ナキーブ	HS354;KhA(I)472a-b
9	A.Nizām al-Dīn Shaykh Aḥmad Suhaylī	詩人,軍人(印璽官,アミール), 'A.Sh.の従者(ナーイブ),献呈著書	BW565,577;HS159;KhA(I)475b-476a MA140a; MN64-5
10	A.Radī al-Dīn 'Abd al-Awwal	マドラサ教授	HS355;KhA(Ⅱ)310a
11	A.Shams al-Dīn Muḥammad b.A.Yūsuf	マドラサ教授	HS581-2;KhA(I)473a
12	Kh.'Abd al-Raḥmān	マドラサ教授	HS359;KhA(I)475a
13	Kh.H.Ghiyāth al-Dīn Muḥammad Dihdār	アーゼルバーイジャーン出身,学職者, 'A.Sh.の従者(親近)	BW626-32;MA169a
14	Kh./M.Āṣafī	詩人,'A.Sh.の従者(マフスース)	HS354;KhA(I)477a;TSh584
15	Kh.Maḥmūd Tāybādī	No.31の従者,'A.Sh.の従者(ナーイブ)	BW565,577;LN56;MN128
16	Kh.Nizām al-Dīn Yaḥyā	詩人,文章家,能書家	KhA(I)476b;MN123
17	Kh.Shihāb al-Dīn 'Abd Allāh al-Bayānī Marwārīd	サドル,勅書官,軍人(アミール),文章家, 演奏家,能書家,'A.Sh.が息子と呼ぶ	BN175a;HS325-6;KhA(I)476a-b MN123;TS102-3
18	M.'Abd al-Ḥayy Tūnī	王子のサドル,医師	KhA(I)475b
19	M.'Abd Allāh Jāmī	詩人	KhA(I)476b-477a;MN69-70
20	M.Āhī	ヘラート出身,詩人,王子の従者	KhA(Ⅱ)313a;MN73
21	M.Ahlī (Ahlī Khurāsānī)	トルシーズ出身,詩人	KhA(Ⅰ)477a;MN89;TS188
22	M.Athīrī	詩人	KhA(Ⅱ)313a
23	M.Bina'ī	ヘラート出身,詩人,作曲家,'A.Sh.の従者, 才能は評価されるが'A.Sh.と対立	BN179b-180a,182b;BW613;HS348 KhA(I)477a;MN66
24	M.Diyā	タブリーズ出身,詩人	HS609;MN72
25	M.Fṣīḥ al-Dīn Ṣāḥibdārā Astarābādī	アスタラーバード出身,詩人, 'A.Sh.の従者(ナーイブ),献呈著書	HS349-50;KhA(I)478a;MA140a;MN78

26	M.Ḥasan Shāh	詩人, 'A.Sh.の従者	HS344-5;MN68
27	M.Jalāl al-Dīn Qāsim	天文学者, 文章家, 能書家	KhA(I)478b
28	M.Kamāl al-Dīn 'Abd al-Razzāq	ヘラート出身, ハーネカーのシャイフ, 歴史家, 'A.Sh.の従者	HS335;KhA(Ⅱ)305b;MN35
29	M.Kamāl al-Dīn Shaykh Buhlūl	詩人, 文章家, 20年以上'A.Sh.の従者	BW506-7;KhA(I)478b
30	M.Nizām al-Dīn Astarābādī	詩人, 'A.Sh.称賛の頌詩を詠み恩恵に浴す, 献呈著書	HS347;KhA(I)477a;MA140a;MN108
31	M.Nūr al-Dīn 'Abd al-Raḥmān Jāmī	ジャーム出身, 詩人, 神秘主義者, 'A.Sh.との間に親交, 献呈著書	HS337-8;KhA(Ⅱ)305a;MA142b
32	M.Nūr al-Dīn Hilālī	トルコ系, 詩人	HS361-2;KhA(I)477a; MN77
33	M.Riyādī	ザーヴェ出身, ザーヴェのカーディー, 詩人	HS346-7;KhA(I)477a;MN86
34	M.Sayf al-Dīn Aḥmad al-Taftāzānī	シャイフ・アルイスラーム, 献呈著書, この人物の講義に'A.Sh.が出席	HS349;KhA(I)471a-b;MA133b
35	M.Sayfī	ブハーラー出身, 詩人	HS346;KhA(Ⅱ)312b;MN65-6
36	M.Shams al-Dīn Muḥammad Badakhshī	クンドゥズ出身, 詩人, 30年間'A.Sh.の従者(ナーイブ), 献呈著書	BW565, 577;HS347;KhA(I)477b MA140a;MN108
37	M.Sharbatī	文章家, 詩人, 画家, 'A.Sh.が育成	MN119
38	M.Shawqī	チェチェクトゥ出身, 詩人	KhA(I)477a;MN72
39	M.Shaykh 'Abd Allāh Kātib	学職者, 能書家, 'A.Sh.の従者	KhA(I)477b
40	M.Shīram (Shīram Shaghāl)	詩人, 'A.Sh.の従者(ナーイブ)	BW577;MN128
41	M.Sulṭān Maḥmūd		KhA(I)475a
42	M.Yūsuf Badī'ī	アンディジャーン出身, 詩人, 'A.Sh.の従者	HS337;KhA(Ⅱ)305b
43	S.Shams al-Dīn Muḥammad Andijānī (Mīr Sar Barahna)	アンディジャーン出身, マザールのシャイフ, サドル, 文人, 'A.Sh.の友人	BN176a;HS322-3;KhA(Ⅱ)305b-306a MN100-101
44	Q./Kh.Mas'ūd Qummī 詩人	'A.Sh.の従者	HS336-7;MN44

能書家(ナスターリーク体)

45	M.'Abd al-Jamīl	能書家, dār al-siyādaの教授	HS346;KhA(I)466a, 479a-b
46	M.'Adīmī	能書家, 詩人	KhA(Ⅰ)479b
47	M.'Alā' al-Dīn Muḥammad	能書家, 'A.Sh.の図書館で上達	KhA(Ⅰ)479a
48	M.Buḥrānī	能書家	KhA(Ⅰ)479b
49	M.Darwīsh Muḥammad Bāgh-i Shahrī	能書家, 詩人	KhA(Ⅱ)315a;MN116
50	M.Sulṭān 'Alī Mashhadī	マシュハド出身, 当代随一の能書家	HS351-2;KhA(I)478b-479a;MN115
51	M.Sulṭān 'Alī Qāyinī	能書家, 'A.Sh.が育成	KhA(I)479a;MN116
52	M.Sulṭān 'Alī Sabz	能書家	KhA(I)479a
53	M.Sulṭān Muḥammad b.M.Nūr	能書家, 神秘主義者, 'A.Sh.が育成	KhA(I)479a
54	M.Sulṭān Muḥammad Khandān	能書家, 演奏家(ネイ奏者)	HS363;KhA(I)479a;LN148
55	M.Zayn al-Dīn Maḥmūd	能書家	KhA(Ⅱ)315a

画家・技師

56	Kh.Mīrak Naqqāsh	画家	KhA(I)479a

57	M.Ḥājjī Muḥammad Naqqāsh	マシュハド出身,画家,技師, 'A.Sh.の息子代わり,従者,図書館の管理人	HS348;KhA(I)479a;(II)315a-b MA173a;MN108
58	M.Muḥammad Isfahānī	技師	KhA(I)480a
59	U.Kamāl al-Dīn Bihzād	当代随一の画家,'A.Sh.が保護・育成	BN171a;HS362;KhA(I)480a
60	U.Qāsim 'Alī Chihragushāy	画家,'A.Sh.の図書館で制作活動	KhA(I)480a
61	U.Shāh Muẓaffar	Abū Sa'īd時代最高の画家	BN171a;TR133a-b

演奏家

62	Ḥ.Qazāq	カーヌーン奏者,'A.Sh.が育成	KhA(I)480a
63	U.Ḥusayn 'Ūdī	ウード奏者,'A.Sh.が育成	BN171a,182a;KhA(I)480b
64	U.Qul Muḥammad 'Ūdī	シャブルガーン出身,'A.Sh.が育成, ウード・コボズ・ギッジャク奏者	BN171a;KhA(I)480a-b;MN118
65	U.S.Aḥmad	ギッジャク奏者	KhA(I)480a
66	U.Shāh Qulī Ghijjakī	ギッジャク奏者	BN182a;KhA(I)480a
67	U.Shaykhī Nāyī	ネイ・ウード・ギッジャク奏者,'A.Sh.が育成	BN171a,182a;KhA(I)480b-481a

• 略号一覧：A.＝Amīr(No.5,9の場合は軍人の地位を表し,その他の場合は著名なサイイドへの尊称)
H.＝Ḥāfiẓ ; Kh.＝Khwāja ; M.＝Mawlānā ; Q.＝Qādī ; S.＝Sayyid ; U.＝Ustād ; 'A.Sh.＝'Alī Shīr
• よく知られた通り名を持つ者については,その通り名を人名欄の(　)内に示した。
• 'Alī Shīrへの献呈著書を著している場合は,単に"献呈著書"とのみ記した。

表IIに挙げた'Alī Shīrの被保護者67名の内,ウラマー・文人が44名と大きな割合を占めている。この中には文人(主に詩人)と見なすべき者が多く,11名(No.3,8,10,11,12,17,18,28,33,34,43)だけはウラマーとしての公式の職務に従事しているが,その内3名(No.17,28,33)はウラマーではなく文人として名声を得た者たちである[33]。直接的交渉のみによる'Alī Shīrの被保護者は,主に文人であったと言えよう。これはチャガタイ・

呈著書をヘラートに送っており[HS：606 ; MA：140 a],サマルカンドにおける'Alī Shīrの師Khwāja Faḍl Allāh Abū al-Laythīの縁者(恐らく息子)たちも'Alī Shīrへの献呈著書を執筆している[MA：134 a]。また,学芸保護活動とは言えないが,マー・ワラー・アンナフルにおけるナクシュバンディー教団の最有力者Khwāja Aḥrārの息子がメッカ巡礼の際に商人から借りた15,000ケペキー・ディーナールを'Alī Shīrが代わりに支払ったという例もある[MA：169 b-170 a]。

33) 表IIの欄中では,(ムアンマーを含む)ペルシア韻文学,「作文(inshā')」,「年代記」を得意としていた場合は,それぞれ詩人,文章家,歴史家と表記し,文学活動は行っているが何を得意としたか不明確な者だけ,単に文人とした。尚,No.8,10,11,34のウラマーについては筆者の前稿をも参照されたい(No.11の人物は後にラカブを変更したようである)[久保 1988：151-157,159]。

トルコ文学の確立者 'Alī Shīr の文学への興味によって簡単に説明がつくように思われる。しかし,表Ⅱ中トルコ語の詩を詠んだと伝えられる者は3名(No.9, 38, 49)確認できるのみで[KhA(Ⅱ):315 a ; MN:65, 72],外の文人たちは専らペルシア語で文学作品を著したようである。周知の如く 'Alī Shīr 自身はトルコ語の長所を説き,トルコ文学の発展を願っていたが,[34] 彼の努力にも拘わらず文章語としてのペルシア語の優位は揺るぎないものであった。当時の文人たちの本音は,次の逸話において,'Alī Shīr の怒りを恐れぬ詩人 Mawlānā Binā'ī(表Ⅱ-No.23)が代弁している。

> [一時ヘラートを離れてアク・コユンル王国の宮廷にいた] Mullā Binā'ī がイラークから[再びヘラートに]やって来たとき,ある日,ミール['Alī Shīr]の会合に最も学識ある人々や最も気高い人々が集まっていた。ミールが「[アク・コユルン王国の君主] Ya'qūb Beg の優美さや機知についてお話し下さるように」とおっしゃった。Mawlānā Binā'ī は「Yaqūb Beg の如何なる優美さや好ましさも,彼がトルコ語の詩を詠まないということには及びませんでした」と言った。ミールが「おお Binā'ī よ,汝は粗野と冷淡さの度を過ごした。汝の口は穢されるのがふさわしい」とおっしゃると,Binā'ī は「穢すのは簡単です。トルコ語の詩を詠めばいいのですから」と言った。[BW:614-5]

確かにトルコ文学史上,チャガタイ・トルコ文学の確立や(主に軍人の)トルコ系文学者の台頭(ティムール朝王族,'Alī Shīr, 表Ⅱ-No.5, 9, *Shaybānī-nāma* の著者 Muḥammad Ṣāliḥ など)は注目に値するが,当時文章語としてのトルコ語の地位はペルシア語に遠く及ばなかったのである。トルコ文学の発展を願った 'Alī Shīr 自身,当時の常識としてペルシア文学を愛好しており,自らペルシア語の著作を残している。それ故 'Alī Shīr の文人保護は,自然とペルシア文学の奨励という格好になったのである。

それでは次に 'Alī Shīr と被保護者たちの直接的交渉について見てゆこう。表Ⅱの分類で言うと,能書家保護の形態が最も問題なく明確にできる。何故なら KhA において,表Ⅱ-No.45-55と表Ⅰ-No.43, 計12名の能書家の略伝の冒頭には,「気高き主殿[='Alī Shīr]の賑わしき図書館(kitābkhāna)で書写を行った能書家の幾人かの叙述」という標題が付されているからである[(Ⅰ):478 b]。'Alī Shīr の図書館において表Ⅱ-No.45の人物は 'Alī Shīr 作のトルコ詩の書写に従事し,表Ⅰ-No.43の人物はこの図書館所蔵の不

---

34) そのために執筆した *Muḥākamat al-Lughatayn* は余りにも有名であるが,Munsha'āt 編纂の意図もここにある[Munsha'āt:1-2]。

完全写本の完成を 'Alī Shīr に命じられた[KhA(Ⅰ)：479 a ; MA：179 a-b]。'Alī Shīr の図書館は写本の所蔵だけでなく写本の製作活動をも担ったのであり，書写に従事する能書家たちに対しては，当然何らかの報酬が用意されていたであろう。また，この図書館で能書家が育成されることもあったようで，表Ⅱ-No.47の人物はここでナスターリーク体を学び，上達したという[KhA(Ⅰ)：479 a]。以上のように，直接的交渉という表現は余り適わないかもしれないが，'Alī Shīr による能書家の保護育成活動は彼の図書館を舞台に展開されていたのである。

この 'Alī Shīr 図書館は，表Ⅱ-No.60の人物の例に見られるように，画家の保護にも貢献していたと考えられる。そもそも写本製作には，能書家と同様に画家，厳密には模様絵師(mudhahhib)と細密画家(muṣawwir)が不可欠である。'Alī Shīrの図書館については詳しくはわからないが，やや時代の遡る Shāh Rukh の子 Bāysunghur の図書館では，能書家，模様絵師，細密画家，製本師が制作活動に従事したという[ヤマンラール 1988：163 ; Aḥad 2536：47]。恐らく 'Alī Shīr の図書館は能書家のみならず画家の保護·育成の場でもあったであろう[35]。

次に，ウラマー·文人の場合は，表Ⅰにも見られた 'Alī Shīr への献呈著書の存在が注目される。表Ⅰと表Ⅱで合計19人が著した 'Alī Shīr への献呈作品について，執筆の事情や 'Alī Shīr 側の対応などに関する情報は極めて少ないが，表Ⅱ-No. 7 の文人のように依頼によって執筆した場合は当然褒賞が与えられたであろうし，依頼がなくても，完成した著作を 'Alī Shīr に直接献呈して褒賞を得る場合もあったであろう。'Alī Shīr とは関係しないが，当時の献呈著書にまつわる興味深い事例がある。それは，Mawlānā Shihāb Mudawwin なる文人が著作を君主 Sulṭān Ḥusayn に直接献呈すると，Sulṭān Ḥusayn はこの文人に現金1000タンガを与え，更に，新たな作品の執筆を依頼し，完成後の褒賞として毎年現金5000タンガと穀物500マンの「給与(waẓīfa)」を提示したというものである[BW：587-8][36]。恐らく 'Alī Shīr への献呈著書の場合も，執筆者は一時的·恒常的に

---

35) 恒常的なこととは思えないが，表Ⅱ-No.59の画家が，後述するような 'Alī Shīr の会合において作品を献呈し，「鞍と手綱付きの馬とふさわしい衣」を下賜されたという例もある[BW：907-10]。また，君主 Sulṭān Ḥusayn の場合は，自身の居所の近くに仕事場を用意して表Ⅱ-No.59の画家に制作活動を命じたという[Munsha'at：34]。

36) ここに見られるタンガが，1タンガで2ケペキー·ディーナールに相当するものであれば[Fragner 1986：559]，この文人は1万ケペキー·ディーナールという相当な額の年金を約束されたことになる。

'Alī Shīr の保護を受けることになったであろう[37]。

ウラマー・文人について更に注目されるのが，表Ⅱの44名中少なくとも17名が 'Alī Shīr の従者であったことである。表Ⅱにおいてウラマー・文人以外の 'Alī Shīr の従者は唯一人(No.57)であり，先に表Ⅰで挙げた 'Alī Shīr の従者4名も，一人(No.40)は医師であるが，一人(No.30)はウラマーであり，残り二人(No.16, 45)は才能豊かな詩人であった[ḤS：360；KhA(Ⅰ)：478 b]。本稿で"'Alī Shīr の従者"としたのは，史料中，正に 'Alī Shīr の「従者(mulāzim)」，あるいは 'Alī Shīr に「付き従っていた(mulāzamat mī-kard；dar mulāzamat awqāt gudharānīd)」とされる者たちのことで，これら全体は，'Alī Shīr に「付き従っていた朋(yār)，友人(muṣāḥib)，食客(nadīm)，学識者(fāḍil)たち」と表現される[BW：613]。ここで言う「朋，友人，食客」は当然「学識者」と重なっており，当時「Amīr 'Alī Shīr は世界の優れた才人(khwush-ṭab')たちや機知に富んだ者(ẓarīf)たちを自身に従えている」と言われていた[BW：530]。つまり 'Alī Shīr のもとには，彼に「付き従う」特定の「才人や機知に富んだ者」の集団，主に「学識者」や文人(特に詩人)からなる従者の集団が存在していたのである。'Alī Shīr は自身の従者たちに某かの物を与えており，本稿Ⅰでも述べたように「彼の従者たちの手に入っていた物」は，'Alī Shīr による「様々な人々への下賜」や「諸建造物の建設」の経費に匹敵したという[MA：151 a]。本稿で確認し得た22名以外に 'Alī Shīr の従者が多数存在したとしても，各自が相当な収入を得ていたことになるであろう。

それでは，'Alī Shīr の従者として彼らは如何なる活動に従事したのであろうか。従者たちの中でも「ナーイブ」，「マフスース」，「親近」と呼ばれた人々は 'Alī Shīr にとって特別な存在であったと思われ，特にナーイブたちは彼の「相談役であり腹心の者であった」という[BW：565]。また，表Ⅱ-No.13(親近)と表Ⅱ-No.25(ナーイブ)の二人は使者として何度も王族のもとへ派遣されており[ḤS：250；Munsha'āt：42, 45, 75]，同じく使者として表Ⅱ-No. 4の人物はアク・コユンル王国の宮廷に派遣された[ḤS：350-1]。一方，'Alī Shīr の邸宅に住み込んで「昼夜」'Alī Shīr 自身の「不可分の部分」の如く仕えていた

---

37) 但し，本文中の Mawlānā Shihāb Mudawwin や同じく Sulṭān Ḥusayn から執筆依頼を受けた Mawlānā Kamāl al-Dīn 'Abd al-Wāsi' al-Niẓāmī なる文人の場合は，完成した作品に Sulṭān Ḥusayn が満足しなかったために，前者には予定されていた褒賞が与えられず，後者の場合は，別の文人に改めて執筆依頼がなされたという[BW：588；ḤS：339]。それ故本稿では，'Alī Shīr への献呈著書が存在するだけでは，その人物を 'Alī Shīr の被保護者とは見なしていない。

従者(表Ⅱ-No.29)も存在する[BW：512]。'Alī Shīr の従者たちは彼のもとに生じる公的・私的な諸問題の処理に従事したのである。しかし,本来ウラマー・文人である彼らには,学芸の担い手として活躍する場も提供されていた。それが 'Alī Shīr の主催する談話会,あるいはより大規模な交歓会である。

15世紀末のホラーサーンと16世紀初めのマー・ワラー・アンナフルの上流社会の状況を伝える BW には"majlis"とか"maḥfil"と表現される会合の記述が頻出するが,それらの会合の多くは,社交の場であり,学芸や機知に富んだ会話を楽しむ,私的な談話会,交歓会である[38]。そのような会合は王族や高官など富裕な人物が主催し,ウラマー,(詩人を主とする)文人たち,更には朗唱家や演奏家が出席し,多くの場合酒を飲んで詩の朗唱,楽器の演奏,物語などを聞き,会話における機知を楽しみ,互いの学識や才能,特に詩才や文才を競った。そして出席者の中で,主催者を満足させるような発言をしたり,才能を高く評価された者に対しては,「褒賞として(ba-rasm-i ṣila)」,賜衣,馬,現金などが与えられるのが常であった。一種の貴族趣味に基づくこのような会合は,とりわけ Sulṭān Ḥusayn 時代のヘラートにおいて盛んに,そして広く催されていた。サマルカンドにおいて貴族趣味の排除に努めた Khwāja Aḥrār [Бартольд 1918：167, 173] と同じナクシュバンディー教団に属する高名な神秘主義者(表Ⅱ-No.31)ですら,シャイフ・アルイスラーム(表Ⅱ-No.34)その他高位のウラマーの訪問を受けた時に「朗唱家たちと演奏家たちに命じてその会合でガザル(叙情詩)を朗唱させ,ナクシュ(歌曲)を歌わせ,楽器を演奏させた」という[RA：278]。トルコ系の王族や軍人たちも同様の会合を好んでおり,特に Sulṭān Ḥusayn の二人の後継者については,BN の著者が実体験に基づいた詳しい記述を残している[間野 1980]。そして,このようなヘラートの状況を詳しく伝える BW の記述の中で,特に 'Alī Shīr の主催する談話会,交歓会が数多く言及されており,先に引用

---

38) "majlis", "maḥfil"といった語は単に複数の人間が集まっている場を指し,従って,ごく小規模な私的会合から王族や政府の要人たちが勢揃いする公的・儀礼的な大宴会まで,また,神秘主義者たちの会合や,説教師の話を聞くための会合(majlis-i wa'ẓ)もこれらの語で表される。'Alī Shīr 主催の会合の中にも談話会,交歓会と称すべきもの以外に,神秘主義的な(とは言ってもかなり趣味的な)会合や,政府要人たちと一般住民の指導者たちを招く,儀礼的な宴会も確認できる[BN：176 a ; MA：154 b-155 b]。勿論,史料中で様々な会合の性格分類がなされているわけではなく,談話会,交歓会という表現,並びに史料中に見られる事例へのこの表現の適用は,総て筆者個人の判断によっている。

したMawlānā Bina'īにまつわる逸話もその中に含まれる。

BW中の'Alī Shīr主催の談話会,交歓会の記述は,出席者の名を逐一挙げず,多くの場合,出席者全体を「学識者,詩人,食客たち」などと表現するのみであるが[BW：520],表Ⅱ-No.23(従者),No.25(ナーイブ),No.36(ナーイブ)と表Ⅰ-No. 3('Alī Shīrの師)の4人だけは複数回の出席が確認できる。'Alī Shīrに付き従っていた者たちは,自然とそのような会合に出席することになったであろう。見方を変えれば,'Alī Shīrとその従者たちが揃えば,当然学芸が話題になり易く,自然と学識や才能を競う場が生じたとも言えよう。'Alī Shīrの従者以外では,表Ⅱ-No.43の人物が恒常的に'Alī Shīrの「会合」に出席しており,表Ⅰ-No.1, 3のウラマーは,'Alī Shīrの「会合」において「講義(dars)」を行っている[KhA(Ⅰ)：472 b ; (Ⅱ)：306 a, 310 b]。従者たちを始め,'Alī Shīr主催の談話会,交歓会に常時出席していた者たちは,自身の学識,詩才,文才,更には機知を発揮し,主催者'Alī Shīrから褒賞を与えられる機会に恵まれた。'Alī Shīr主催の談話会,交歓会に常時出席する者たちは,彼の援助を最も獲得し易い立場にあったのである。

以上のように,ウラマー・文人の場合,'Alī Shīrと被保護者の直接的交渉は,献呈著書の執筆,並びに従者として'Alī Shīrに付き従うことや,'Alī Shīr主催の談話会,交歓会に出席することに見出せるのである。そして被保護者の中でも,従者を始め'Alī Shīr主催の談話会,交歓会に常時出席していた者たちは,'Alī Shīrと特に密接な関係を保持し,その援助を受ける機会に恵まれていた。'Alī Shīrを中心とするこれらウラマー・文人の集団は一種の学芸サークルを構成していたと見なすことができるが,このサークルは彼の学芸保護を性格付ける上で大きな意味を持つ。

当時多くのウラマーや文人が'Alī Shīrの学芸サークルの成員となることを望んでおり,「学識や教養を身につけた人々は皆,専らAmīr 'Alī Shīrの鍛練された目に止まることを最終的に目指していた」という[BW：486]。'Alī Shīrの方も新たな成員を積極的に求めていたようで,毎日ナーイブの一人(表Ⅱ-No.25)を呼び寄せて「今日この町で,如何なる不思議や驚異を見聞きしたか」と尋ね,評判の人物がいると自身のもとに招くのが常であった[BW：503]。BWの著者Wāṣifīは正にそのような経緯で'Alī Shīrの会合に出席し,そのときWāṣifī以外にも三人の学生が'Alī Shīrに紹介された。彼らが'Alī Shīrの会合に出席できたのは,各自がペルシア韻文学に優れていたためであり,Wāṣifīと学生の一人はムアンマーに長じ,残りの学生二人は,各々カスィーダ(頌詩)とマスナヴィーを得意としていたという[BW：504-5]。

このペルシア韻文学の素養や才能は,'Alī Shīrの学芸サークルにおいて,その他の学

識や教養より重視されており，特にムアンマーについては，「[‘Alī Shīr と]御近付きになるにはムアンマー程の手段は外になかった」と言われ[BW：486]，表Ⅱの文人たちの中でこれを得意とする者は極めて多い。その外では，機知や話術の巧みさが‘Alī Shīr との密接な関係を獲得する有効な手段であった。好例として表Ⅱ-No.43の人物が挙げられ，「いつも甘美で軽妙な話，華麗な物語り，冗談を交えた言葉，おかしみを誘う言葉を表現の板に描いていた」という[ḤS：323]この人物は，‘Alī Shīr の「会合」に出席しては「雄弁さや軽妙さ」を発揮していた[KhA(Ⅱ)：306 a]。逆に，ペルシア韻文学における才能や会話における機知が乏しい人物は，たとえ社会的地位が高くとも‘Alī Shīr 並びにそのサークルに受け入れられなかった。最も良い例が，著名なサイイドであり高位のウラマーでもあった Amīr Ṣadr al-Dīn Yūnus という人物である[39]。‘Alī Shīr の師でそのサークルの成員である表Ⅰ-No. 3 のウラマーは，この人物を娘婿とし，何度か‘Alī Shīr の「会合」に同行させていたが，‘Alī Shīr はこの人物の「愚鈍さ」を嫌悪していた[BW：514]。以下に紹介するのは，ある日の‘Alī Shīr の会合での出来事である。

突然，前述のミール[Ṣadr al-Dīn Yūnus]の息のような強い風が吹いて，戸板が激しく打ち合わされた。ミール閣下は気分を害され，Amīr Ṣadr al-Dīn Yūnus に話しかけて「御面倒だが，この戸に鎖をかけてもらえないだろうか」とおっしゃられた。彼はすぐに立ち上がり，鎖に手をかけた。ミール閣下は「向こう側から鎖をかけて戴きたいのだが[＝この場から去ってもらいたい]」とおっしゃられた。彼はこの機知の優美さを解さず，戸に鎖をかけてから座り，会合の出席者たちに向けて歓楽の門を閉じた。偶然この会合に，大変痩せてぞっとするような姿の猫が現れ，ミールの膝の上にあがろうとした。ミール閣下はそれを手でたたいて「この猫は何と嫌な様子をしていることか」とおっしゃられた。ミールの会合の機知を解する人々は皆笑った。ミールは洞察力と聡明さによって，Mīr Ṣadr al-Dīn Yūnus の笑いが模倣によるもので，彼がその機知の本質を理解していないことを見抜かれた。そして彼に「何故，笑っておられるのか」と尋ねられた。彼は赤面して恥じ入り，頭を垂れ，困惑してしまい，息もできなかった。……そして[‘Alī Shīr は]「一部の人々には三種の笑いがあります。一つは Mīr Ṣadr al-Dīn Yūnus 猊下の笑いのように模倣によるもの。もう一つの笑いは，少し考えて笑いの原因を見出したもの。更にもう一つは，第一の笑いに対し，それが何と愚かな笑いであるかとつぶやきながらの笑いです。」とおっ

39) この人物については，筆者の前稿における解説を参照されたい[久保 1988：158]。

しゃられた。Mīr Ṣadr al-Dīn Yūnus はこれを聞くと身もだえした。……[‘Alī Shīr が引き続き Ṣadr al-Dīn Yūnus を攻撃]……[会合に出席していた]食客たちや学識者たちは，Mīr Ṣadr al-Dīn Yūnus が泣いて会合から立ち去る程に大笑いした。[BW：514-20]

高貴な家系に属する高位のウラマーで，ヘラート住民の指導者的立場にあった人物も[40]，機知を解する能力に欠けると，‘Alī Shīr とその学芸サークルにとっては，嘲笑の的に過ぎなかったのである。これに対し，‘Alī Shīr のサークルに属した Mawlānā Binā’ī（表Ⅱ-No.23）は「中流階級（awsāṭ al-nās）」の出身で，しばしば ‘Alī Shīr を揶揄する毒舌家であったが，‘Alī Shīr は彼の才能を高く評価していた[BW：593][41]。‘Alī Shīr は家系や出自に余りこだわらず，才能に恵まれた者を広く求め，自身の周囲に集めていたのである。‘Alī Shīr の学芸サークルでは，飽くまでも ‘Alī Shīr の趣味と価値観の範囲内ではあるが，能力主義が通用していたと言えよう。

最後に，最も情報の少ない演奏家保護の形態であるが，当時の社会における演奏家や朗唱家の活躍の場は，富裕な人々が催す上述のような交歓会であった。従って，‘Alī Shīr による演奏家保護は，主に，自身が主催した交歓会での演奏に対する褒賞授与という形をとったと思われる。史料中 ‘Alī Shīr 単独主催の交歓会の記述で演奏家の名が挙げられることはないが，もう一人の高官と共同で催した交歓会の記述では，表Ⅱ-No.64，65の二人の存在が確認できる[BW：526]。尚，演奏家の場合は，表Ⅱの6名中4名までが ‘Alī Shīr に育成されているという点に特色が認められるが，残念ながらその形態を窺う材料は，今のところ得られていない。

以上，‘Alī Shīr と被保護者たちの直接的交渉を考察した。直接的交渉による ‘Alī Shīr の被保護者としては，圧倒的にウラマー・文人，特に詩人を中心とするペルシア文学者が

40）Shaybānī Khān のヘラート占領時には，住民の代表者の一人として Shaybānī Khān のオルドゥに行き，ヘラート住民に課せられる「安全保障金と献上金の額」を受諾した[久保 1988：132-3]。尚，‘Alī Shīr も，広く住民の指導者層を招いた儀礼的な宴会を主催した場合には，自らこの人物を招待したようである[MA：155 a]。

41）結局 Binā’ī は毒舌が過ぎて ‘Alī Shīr の寵を失い，二度もヘラートを離れねばならなかったが[Мирзоев 1976：63，76]，表Ⅱ-No.36の人物の言によれば，Binā’ī と ‘Alī Shīr は強い信頼関係で結ばれていたという[BW：593-4]。あるいは Binā’ī の毒舌も，ある程度までは機知として高く評価されたのかもしれない。

多く，'Alī Shīr への献呈著書執筆の外に，従者として 'Alī Shīr に仕えたり，'Alī Shīr 主催の談話会，交歓会に常時出席することによって保護を受けていた。'Alī Shīr のもとには，それらの者たちで構成される一種の学芸サークルが成立し，そこでは，'Alī Shīr の趣味と価値観の範囲内で能力主義が通用していたのである。能書家，画家，演奏家については，ここで繰り返す程のこともなかろう。

'Alī Shīr による学芸保護の実態把握という目的は，以上の考察により達成し得たものと考える。それでは最後に，これまでの考察の成果をふまえて，'Alī Shīr による学芸保護の性格について考えてみたい。

本稿Ⅰで述べたように 'Alī Shīr は Sulṭān Ḥusayn 宮廷における実力者であり，1488/89年までは，しばしば公式の高い地位に就き，一時期は首都ヘラートの統治者(ḥākim)を務めている。しかし，彼は君主でも王族でもないのであるから，その学芸保護活動，更には慈善活動の背景に，自身やその一族の王権の正当化あるいは美化という，ありがちな政治的意図は存在し得ない。確かに 'Alī Shīr の被保護者たちの中には，君主 Sulṭān Ḥusayn とも密接な関係を持って保護を受けていたと思われる者たち(表Ⅱ-No.5, 9, 13, 17, 25, 31, 43, 50, 59)が存在し，学芸保護における 'Alī Shīr と Sulṭān Ḥusayn の協力体制をある程度は想定できる[42]。だが，彼の学芸保護や慈善活動の華々しさは，現世での蓄財を拒否するという，散財の美学に支えられており，ほぼ疑い無く，その資金の大部分は彼自身の私有財産に負っていた。従って，彼の学芸保護は，その背景に専ら学芸振興への情熱を見出すべきであり，君主や王族による学芸保護に比べると，主体性，及び私的な性格が強く，学芸保護者個人の趣味や価値観をかなり自由に反映し得たと考えられる。

この点を明瞭に裏付けるのが，本稿Ⅲで考察した 'Alī Shīr の学芸サークルであり，そこに見られる能力主義であろう。また，本稿Ⅱで考察した建設活動を通じての学芸保護においてさえ，'Alī Shīr は宗教・教育施設の職員や学生の人選という形で自身の意図をある程度反映させていた。これに対し，'Alī Shīr と並び称される当時のもう一人の学芸保護者 Sulṭān Ḥusayn の場合は，イスラーム国家の君主としての制約に縛られ，'Alī

---

42) Subtelny は Sulṭān Ḥusayn 宮廷における詩人サークルなるものを想定し，'Alī Shīr をその中心人物と考えているが[Subtely 1979：109]，これは BN 中の，Sulṭān Ḥusayn 時代のヘラートに居住した詩人のリストを，Sulṭān Ḥusayn に仕えた詩人のリストと誤解したためであり[Subtelny 1979：117；1983：135, note 62]，殆ど根拠はない。

Shīr 程自由な立場では学芸保護を行なえなかったようである。例えば,著名なサイイドで「西方の学問やその他総ての学問を正しく心得ている」と自身のことを主張していたが,実は「愚鈍,無知,怠惰で有名であった」Shāh Qāsim Nūrbakhsh[43] について,本音では「残念ながら,余の足はあの猊下のもとに向かってくれない」ともらしても[BW：562, 1301],表面上は「彼に対する敬意を強く表明していた」というのである[ḤS：611]。勿論このサイイドの名は,本稿の表Ⅰと表Ⅱ,つまり 'Alī Shīr の被保護者のリストの中に見出すことはできない。自身の趣味と価値観の範囲内とは言え,能力主義が実践された 'Alī Shīr の学芸保護は,学芸の担い手たちを,制約の少ない,より自由な学芸活動,より自由な精神活動へと導いたのではなかろうか。

ただ依然として残る疑問は,'Alī Shīr が自らの私有財産を最大限に活用したとは言え,何故,学芸保護者,更には慈善家として,君主もを凌ぐ名声を築き得たのかということである。本稿Ⅰで確認したように,'Alī Shīr は頻繁に Sulṭān Ḥusayn とその一族に経済的援助を与えてはいるが,学芸保護や慈善活動が,外ならぬ為政者の美徳,栄誉である以上,'Alī Shīr の華々しい建設活動や学芸保護活動に君主 Sulṭān Ḥusayn が抵抗を感じなかったはずはない。しかし,'Alī Shīr は Sulṭān Ḥusayn との親密な関係を最後まで維持し,その学芸保護や慈善活動が抑制された形跡はないのである。これは,当時幅広い階層から 'Alī Shīr に寄せられていた敬意や信頼の大きさにもよるが,実は,為政者 Sulṭān Ḥusayn にとって学芸保護者 'Alī Shīr は,極めて利用価値の高い人物であったのである。

本稿Ⅲで述べた 'Alī Shīr 主催の談話会,交歓会は,その学芸サークルの活動の場であるが,話題は学芸諸分野に限らず多岐に及んでいた。談話会,交歓会は,彼の慈善活動にも利用されたようで,「通常,海の如く寛大なこのアミールと同席する栄誉に浴した方たち('azīzān)は,困窮している者たちの名を上奏していた」という[MA：151 a]。これに 'Alī Shīr がサークルの新たな成員を広く求めていたことも合わさり,彼が主催する談話会,交歓会では,首都ヘラートにおける様々な情報が飛び交っていたはずである。このことを Sulṭān Ḥusayn は十分に承知していた。ある時,ヘラートの統治者(ḥākim ; dārūgha)の一従者による過度の稚児愛好が住民の脅威となったが,誰も公に非難する勇気がなかった。この時,不審に思った Sulṭān Ḥusayn がある人物に命じたことは「下僕(nawkar)として」'Alī Shīr に仕え,「会合で起ったことを総て"気高い書記(Qur'ān：

---

43) 著名シーア派教団の祖 Sayyid Muḥammad Nūrbakhsh の息子で,その兄 Sayyid Ja'far も一時期ヘラートに滞在している[ḤS：611]。

82-11)"の如く巻物に記録し，毎日その日誌を帝王に奏覧する」ことであった[BW：538-40]。また，人払いした場所で直接 'Alī Shīr に向かって「民は余について何と言っているのか」，「余のいないところで，余の至らない点について何と言っているのかが知りたいのだ」と尋ねることもあった[BW：544-5]。君主 Sulṭān Ḥusayn にとって 'Alī Shīr のもとに集まる情報は，民意·民情を窺う上で極めて貴重なものであったのである。それ故，Sulṭān Ḥusayn と 'Alī Shīr の結び付きは，強まりこそすれ弱まることなどあり得なかったのであろう。

尚，Sulṭān Ḥusayn 時代のヘラートにおいて学芸保護活動に従事したのは 'Alī Shīr と Sulṭān Ḥusayn だけではなく，王族は勿論のこと，高官や高位のウラマーも学芸保護，更には慈善活動に従事した。Subtelny は王族以外で 'Alī Shīr を始め 8 人の学芸保護者（表Ⅱ-No.9, 17, 31を含む）を挙げているが[Subtelny 1988 a：490-4]，建設活動から判断する限り，外にも多数存在していたはずである。その中には，'Alī Shīr のように私的な学芸サークルを保持していたと思われる者も確認できる[44]。いずれも規模においては 'Alī Shīr の学芸保護に及ばないが，当時の富裕階級の中に散在するこれら学芸保護者たちの活動が，ヘラートにおける文化の高揚を支えたことは疑いを容れない。もし，これらの者たちの学芸保護においても，'Alī Shīr の場合のような能力主義が実践され，学芸の担い手たちを自由な精神活動へと導いたとすれば，当時のヘラートの文化や社会に関するこれまでの認識を大きく改める必要が生じて来るであろう。勿論それを確かめるためには，多くの事例研究と学芸作品自体の研究が必要となる。今はかかる展望を提示するのみで満足し，問題の解決を遙か将来に期して小論を終えることにする。

〈史料〉

BN：Ẓahīr al-Dīn Muḥammad Bābur, *Bābur-nāma*, ed. A.S. Beveridge, London, 1905.
BW：Zayn al-Dīn Maḥmūd Wāṣifī, *Badā'i' al-Waqā'i'*, ed. А.Н. Болдырев, 1-2, Москва, 1961.
ḤS：Khwāndamīr, *Ḥabīb al-Siyar*, ed. Jalāl al-Dīn Humā'ī, 4, Tehran, 1333.

44）一時宮廷において極めて大きな権力を持ったイラン系高官 Khwāja Majd al-Dīn Muḥammad [Subtelny 1988 a：493；1988 b：130-149]は，'Alī Shīr に促されて合同の交歓会を催すが，その際の経緯から，この人物の主催する談話会，交歓会の出席者の顔触れは，'Alī Shīr の談話会，交歓会のそれとは随分異なっていたことが窺える[BW：523-4]。

KhA : Khwāndamīr, *Khulāṣat al-Akhbār.*

(Ⅰ) : MS. Süleymaniye Cami Kütüphanesi, Aya Sofya 3190.

(Ⅱ) : MS. Süleymaniye Cami Kütüphanesi, Aya Sofya 3191.

LN : Fakhrī Harātī, *Laṭā'if-nāma, The Majālis-un-Nafā'is. "Galaxy of Poets" : Two 16th Century Persian Translations,* ed. 'Alī Aṣghar Ḥikmat, Tehran, 1945.

MA : Khwāndamīr, *Makārim al-Akhlāq,* ed. T.Gandjeï, Cambridge, 1979.

Mu'izz : *Mu'izz al-Ansāb fī Shajarat Salāṭīn Mughūl,* MS. Bibliothèque Nationale, Ancien fonds persan 67.

Munsha'āt : Mīr 'Alī Shīr, *Munsha'āt,* Bākū, 1926.

MN : Mīr 'Alī Shīr, *Majālis al-Nafā'is,* tr. Суйима Ганиева, Сочинения, 9, Ташкент, 1970.

RA : Mawlānā Fakhr al-Dīn 'Alī, *Rashaḥāt 'Ayn al-Ḥayāt,* ed. 'Alī Aṣghar Mu'īniyān, 1-2, Tehran, 2536.

ShN : Khwāja 'Abd Allāh Marwārīd, *Sharaf-nāma,* ed. H. R. Roemer, Wiesbaden, 1952.

TR : Mīrzā Muḥammad Ḥaydar Dughlāt, *Ta'rīkh-i Rashīdī,* MS. British Library, Add. 24090.

TS : Sām Mīrzā Ṣafawī, *Tuḥfa-yi Sāmī,* ed. Rukn al-Dīn Humāyūn Farrukh, Tehran, 1347.

TSh : Amīr Dawlatshāh Samarqandī, *Tadhkirat al-Shu'arā',* ed. Muḥammad 'Abbāsī, Tehran, 1337.

Waqfīya : Mīr 'Alī Shīr, *Waqfīya, The Majālis-un-Nafā'is. "Galaxy of Poets" : Two 16th Century Persian Translations,* Tehran, 1945, muqaddama-yi muṣaḥḥiḥ.

〈二次文献〉

Aḥad Pārsā-yi Quds

2536 Sanadī Marbūṭ ba-Fa'ālīyathā-yi Hunarī-yi Dawra-yi Tīmūrī dar Kitābkhāna-yi Bāysunghurī-yi Harāt, *Hunar wa Mardum,* 175

Allen,T.

1981 *A Catalogue of the Toponyms and Monuments of Timurid Herat,* Cambridge, Mass.

Fragner,B.

1986 Chapter 9 : Social and Internal Economic Affairs, *Cambridge History of Iran, 6 : The Timurid and Safavid Periods,* Cambridge.

Golombek,L. and Wilber,D.

1988 *The Timurid Architecture of Iran and Turan,* 1, Princeton.

Grousset,R.

1944 ルネ・グルセ(後藤十三雄訳),『アジア遊牧民族史』,東京

O'Kane,B.

1987 *Timurid Architecture in Khurasan,* Costa Mesa.

Subtelny,M.E.

1979 The Poetic Circle at the Court of the Timurid, Sultan Ḥusain Baiqara, and its Political Significance, Ph.D. diss. Harvard University.

1980 'Alī Shīr Navā'ī : Bakhshī and Beg, *Harvard Ukrainian Studies,* 3-4.

1983 Art and Politics in Early 16th Century Central Asia, *CAJ,* 27(1-2).

1988a Socioeconomic Bases of Cultural Patronage under the Later Timurids, *International Journal of Middle East Studies,* 20(4).

1988b Centralizing Reform and its Opponents in the Late Timurid Period, *Iranian Studies,* 21 (1-2).

Бартольд,В.В.

1918 Улугбек и его время, Сочинения, 2(2).

1928 Мир-Али-Шир и политическая жизнь, Сочинения, 2(2).

Болдырев,А.Н.

1957 Зайнаддин Васифи : Таджикский писатель XVIв.(Опыт творческой биографии),Сталинабад.

Мирзоев,А.М.

1976 Камал ад-Дин Бинаи, Москва.

Семенов,А.А.

1960 Взаимоотношения Алишера Навои и Султана Хусейн-Мирзы, Исследования по истории культуры Народов Востока, Москва.

安藤 志朗

1985 ティムール朝Shāh Rukh麾下の中核amīr,『東洋史研究』,43(4).

岩武 昭男

1989 ニザーム家のワクフと14世紀のヤズド,『史林』,72(3).

川本 正知

1989 ホージャ・アフラールのワクフ文書,『人文学報』,63.

久保 一之

1988 16世紀初頭のヘラート——二つの新興王朝の支配——,『史林』,71(1).

間野　英二

1977　ティムール朝における一貴顕の系譜——Chākū Barlās家の場合——,『オリエント』,20(1).

1980　バーブルとヘラート,『オリエント』,23(2).

ヤマンラール・水野美奈子

1988　イスラームの画論と画家列伝,『オリエント』,31(1).